

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響-旧蔵書の調査を通じて-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2013-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久松, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14267

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響
旧蔵書の調査を通じて

久松健一

Influence des livres français sur l'œuvre de ENDO Shusaku

à travers sa collection privée

HISAMATSU Ken'ichi

Introduction : Invisibilité de l'influence littéraire

Qu'est-ce que l'influence en littérature ? Comment l'imaginer ? Un exemple : « Une feuille de papier blanc se trouve sur un bureau. On s'assoit et on la prend. Puis on y appose doucement son sceau encre sur le tampon-encreur rouge. Ainsi, sur le papier, une marque rouge vif apparaît. » Il est possible d'interpréter cette situation comme l'image que le mot "influence" évoque en nous.

En réalité, trouver cette empreinte n'est pas facile. Dans le domaine de l'art notamment, il est très important de ne pas laisser d'indices précis dans une œuvre. Les créateurs habiles dissimulent les preuves sur leurs lieux de création comme des voleurs : l'influence artistique et le plagiat sont assimilables l'une à l'autre. Dans une métaphore, Paul Valéry dit que « le lion est fait de mouton assimilé. »

On a besoin de beaucoup d'objectivité quand on pense à ce qui a influé la production littéraire d'un romancier. Il nous faut abandonner notre prudence et notre curiosité personnelles, tout en sachant que nous ne serons jamais de vrais détectives. Saisir d'abord la vérité pure afin d'en mesurer ses conséquences est une prémisse majeure. Donc, dans cette étude, autant que possible (*), je me consacre entièrement à ne présenter que des faits objectifs. Vous trouverez les détails ci-dessous.

(*) Si nécessaire, je suspends mon attitude ascétique. Car comme le dit le proverbe, "le mieux est l'ennemi du bien".

Etude bibliographique : Ses livres français et son journal

Endo Shusaku a continué à écrire son journal pendant son séjour en France de juin 1950 à janvier 1953. Il a noté beaucoup d'impressions et d'opinions quotidiennes dans son agenda. Par exemple, en faisant mention du temps qui s'écoule durant les quelques jours qu'il a passés à Rouen, il écrit : « Trois semaines, ailleurs, à la campagne par exemple, cela semblait un jour, ici ce sont des années. » Ayant beaucoup de mal à s'adapter à sa nouvelle vie, le temps lui paraît lent comme une eau stagnante. Sur le même temps, il a rédigé un mémento de lecture détaillé.

En confrontant "les descriptions de ses lectures" et "les livres français de sa collection", lesquels sont actuellement conservés au musée public de la littérature de la ville de Machida, j'ai

essayé de comprendre sa façon de lire et j'ai analysé ce qu'il a acquis par ses lectures. Il en résulte que ses expériences pourront se diviser en quatre grands domaines : (1) celui des romanciers chrétiens : par exemple, François Mauriac, Julien Green, Graham Greene, Georges Bernanos et Charles du Bos (2) celui des romanciers américains (y compris celui des romans policiers) : surtout William Faulkner et John Steinbeck (3) celui des auteurs du personnalisme et de l'existentialisme : Emmanuel Mounier et Jean-Paul Sartre et enfin (4) celui des œuvres du Marquis de Sade.

Il se peut que cette classification soit arbitraire et fasse apparaître des préjugés à propos de notre sujet « l'influence des livres français sur l'œuvre de Endo Shusaku ».

Donc, tout en subissant l'objective description bibliographique, j'ai essayé d'éviter le désir, qui menace souvent les chercheurs, d'imposer aux autres mon point de vue ou mon opinion dans ce chapitre. Pour cela, je me suis positionné à l'arrière-plan et j'ai travaillé à reproduire chronologiquement et fidèlement ses inscriptions, ses notes, ses soulignements, *etc.*

Thérèse Desqueyroux et Endo Shusaku

Endo Shusaku a lu « Thérèse Desqueyroux » à plusieurs reprises, c'est son roman préféré. De fait, en citant ce roman, il écrit « Le roman que j'aime. » Seulement ? Non. Il dit aussi qu'il tourne d'abord les pages de cette œuvre pour rétablir la respiration de son écriture, avant de se remettre au travail.

Alors, comment a-t-il lu ce roman ? Qu'a-t-il assimilé ? Dans ce chapitre, j'ai donné libre cours à mon imagination, en levant la contrainte que je m'étais imposée et en analysant les traces de sa lecture dans sa traduction de « Thérèse Desqueyroux » en japonais conservée à Nagasaki (musée littéraire de Endo Shusaku). Il y a en particulier beaucoup de relations intéressantes entre ses premières œuvres et ce chef-d'œuvre de François Mauriac. Vous trouverez le développement de ce point ci-après, dans l'article rédigé en japonais.

《個人研究第1種》

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響 旧蔵書の調査を通じて

久松健一

影響とはなにか（序にかえて）

《influence》の語源を手元にある辞典で調べると、占星術にさかのぼる語であると知れる。「中世ラテン語 *influentia* 『天体の運行が人に及ぼす力』に由来する」とあるからだ。国語辞典で「影響（影が形に従い、響きが音に応じるの意から）」を引くと、「物事の力や作用が他のものにまで及ぶこと」とある。文字通り、先発するなにかが、後発のなにかに影を落とし、響く、その密接な結びつきのことである。ただ、この影や響きをそのままつかみ出すことは容易でない。

ヘンリー・ミラーは『描くことはふたたび愛すること』のなかで、みずから手がけた絵画に触れ、こう記している。

「影響という点では、疑いようもなく日本の画家から最も深い影響を受けている。わが家の壁にはじめて掛けたのは日本人の絵であり、最後に掛けるのも日本人の絵であろう。しかし、影響という語をこのように使うのはおこがましかろう。ぼくの水彩画には日本の画家たちの熟達した技巧も、献身的な熱意も、アプローチの仕方さえ、まるで反映していないからだ」

たとえば右の絵を見て、「日本の画家からの影響」がいかなるものかをつかみとり、語れる人が、どれだけいるだろうか。

あるいは「影響関係を想定し、作品研究を進めていって結局のところ影響はなかったという結果に終わることが稀でない。影響らしくとも、影響そのものと実証的に論定するのが困難なことのほうが多い」（『実存主義の文学』）と、哲学者・矢内原伊作は影響の考証的アプローチの難儀を説く。英文学者・矢野峰人は文学作品を比較



写真1 ヘンリーミラー「サラソータ」

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

対照し、痕跡を特定化する作業のきびしさについてつぎのように記している。

「犯人は巧妙な者である程罪跡を残さない。同様に巧妙な芸術家は借用剽窃の証跡を残さないように努める。従って、このような場合に、『科学的』ならん事を努めるなら、却って大魚を逸する事になるであろう」（『新・文学概論』）

詩人ヴァレリーが奇しくも言ったように、《Le lion est fait de mouton assimilé.》「獅子の体は羊を同化してできたもの」なのである。獅子は羊を食べるが、消化、同化された羊は獅子の血肉となる。そのふたつの姿は似て非なるもの。つまり、影響を受けて書かれた作品は先達を摂取し、それを消化し、「自己」を形作るものの、その途中のプロセスはまことにとらえにくい。

しかり、影響とは「たとえば何もない白紙の上に、赤い鮮やかな判子が捺されるといった」明らかな痕跡を指すのではない。明々白々な証跡、それは「影響」の本質ではないのだ。アンドレ・ジッドが『文学における影響について』のなかで述べているように、それまで知らなかった自身への「啓示」であり、「説明」であるのが「影響」でありながらも、それは「類似によってしか働かない」ものであるからだ。言い換えれば、「影響という作用が起こる以前に、影響をあたえる者と影響をうける者との間に、すでに何らかの関係があったのである。関係とは、いいかえれば、共通点ということだ。影響をうける素地が、しらすしらすのうちに準備されていて、その上に影響という作用が成立するもの」（高橋たか子『犬の魂』）であるのだ。

こうした「影響」なるものの性格に鑑みて（とりわけ文学における「影響」をとらえる難しさに照らして）、第1章では、以下の姿勢を自らに課した。できるだけ、黒子に徹すること。

遠藤周作が留学中に記した『日記』を手がかりに、その時々には遠藤が手にした原書（現在は町田市民文学館所蔵）を繰りながら、それぞれの作品を彼がどう読んだのか、その足跡を禁欲的に探った。禁欲的とは、いらぬ先入観や憶断を避け、書物に残された書きこみや彼の引いた下線などを、与えられた紙幅のなかで、可能なかぎり忠実に再現するように努めるという意味だ。これはかくかくに波紋を投げかけたのではないか、あの箇所はこの小説に通底しているのではないかといった私感を記すことはできるだけ禁じ（ただし、活字のポイントを下げ、◆のマークを付した箇所は、遠藤文学を探るポイントとなるのではないかと独自に判断した内容で、この章で已に課した禁を破っている）、いわば、一次資料となることに眼目を置いた。

ここから先は、研究者各位がそれぞれの判断で行うにまかせるのが妥当で、いらぬ追記や詮索は、読解の自由をゆがめかねない。サルトルは作中人物の「自由」を唱えたが、ここでは読者の「自由」を最大限尊重したいと考える。なお、ときに原文（大半はフランス語）を邦訳し、ときにフランス語をそのまま載せたのは決められた枚数の都合であり、筆致のリズムである。他意はない。

ついで、第2章では、《Thérèse Desqueyroux》の遠藤周作訳『テレーズ・デスケールー』（遠藤

自身の手沢本)に残された読書跡をめぐって、簡単な分析を試みた。「私の愛した小説」と断じてはばからないこの佳作への遠藤のいかなる読みが、彼の小説作品のなかにどんな影を投じ、どんな反響音を響かせているのかを、私個人の考えも入れ論じた。なかなか見えにくい「影響」なるものを、すなわち「獅子に同化した羊」のなんたるかを、少しでもとらえようとしたささやかな奮闘の跡である(直接は目に触れないが、過去の拙論も参考文献という形でこの分析を後押ししている)。

なお、査読をいただいた方からは、この部分を第1章に組みこむべしとのご指摘をうけたが、分量は少ないながら、影響分析のひとつの試みとして独立の章を構成できるものと判断し、手入れはしていない。「誰も読まない」と揶揄され、「くたばれ」とまで言われる紀要論文だが、この場は書き手の判断で冒険の許される自由な時空であると信じたい。

1章 留学時代に遠藤周作が読んだフランス語の原本を追う

「自分が小説を書くようになったのは—多くの人が誤解しているように自分の人生体験からではない。人生体験という事実ではなく芸術体験という真実のおかげである」(『万華鏡』)

前提

遠藤がフランス留学中につづった『日記』(具体的には『作家の日記』ならびに、その続編として刊行された「滞仏日記」のこと。いずれも『遠藤周作文学全集15巻・新潮社』所収)に照らしながら、彼が異国でいかなる書物をどう読み進めたのかをまとめたのが本章である。1950年6月10日からはじまる『日記』には、フランスでの日々の暮らしのあれこれとともに、どんな書物を手にし、それをどう読んだのかがときには詳細に、ときにさらりと、備忘録代わりの『日記』内に記されている(◆記述されている内容から、またその文体から、後に一部を公開することを前提に書かれていたと感ぜられる)。そして、遠藤青年がそのとき手にした洋書の多くが、現在「町田市民文学館・ことばらんど」に所蔵されている。

『日記』の記述内容と実際に遠藤が手にした書物とを照らしながら、それぞれの作品をどう読んだのか、『日記』だけでは不明な部分を照射する意味から、ここでその痕跡を追った。注目して読んでいる箇所や読書のポイントなどを、書きこみや下線などから具体的に探り、簡略にまとめるよう努めた。『日記』に記載された書物を時間の流れにそって拾いあげながら、必要であると判断した場合には『日記』意外の資料も適時、紹介しながら、小説家としての素地を築いていく遠藤の過去を追ったのだ。ときには、客観的な背景等、読み手の理解を容易にすると判断した事項を補注の形で書き添えてもいる。

なお、『日記』に触れられていても読書の形跡のない本(下線、書きこみがほとんど見当たらない書籍)、あるいは所在不明の書物については細かな言及をしていない。また、行方のわからない雑誌類については原則、触れていない。

(付記) 遠藤がフランスに留学することとなった背景

第2次大戦後、第1回目のフランス政府給費留学生には、教授・助教授クラスの人々が選ばれた。美術史・吉川逸治、建築・吉坂兼正、仏文学・森有正である。その錚々たる面々とは別に、イエズス会・ウッサン神父の尽力で、将来を嘱望される青年数名（クリスチャンであることが条件）をフランスのカトリック大学へ派遣することと相成った。希望者16名のなかから銓衡された先発隊

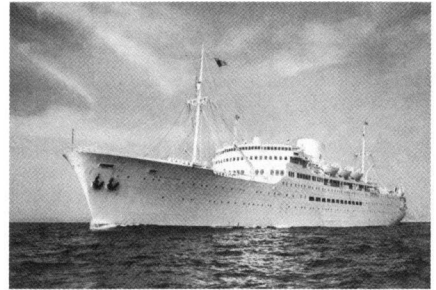


写真2 ラ・マルセイエーズ号

は、リヨンへの留学が認められた三雲夏生（慶大卒）、三雲昂（東大卒）、遠藤周作（慶大卒）、それにストラスブールにおもむいた鎌田正夫（東大卒）である。遠藤たちと同じ船に乗った、井上洋治（東大卒）はボルドーのカルメル会入会が目的で、いわゆるカトリック学生としての留学とは別枠のようだ。なお遠藤たちは、ラ・マルセイエーズ号の四等客船（クレーンの並んでいる船尾の上甲板と荷物を入れる船艙との間の中甲板 entrepont に、折りたたみ式のカンバスベッドをしつらえた空間。吃水線の下に位置した）*でフランスへ向った。

* 四等客船の価格「仏蘭西にいく船に乗って」より引用

ラ・マルセイエーズ号とは当時、ヨーロッパと横浜とを往復する唯一の外国船で、日本郵船も大阪商船も戦争のためにこっぴどくやられていたから、これ以外に乗る船はなかったのだ。／ところが、その船賃が一番安い二等のCクラスで十六万円もするという。十六万という大金は当時、大学を出たばかりのぼく等、貧書生にはとても手が出ないシロモノである。「弱ったなあ。困るなあ」ぼく等三人は頭をかかえて、事務室の隅で溜息ばかりついていた。（中略）「あの…五万円のところもあるのよ」「五万円**ですって」とぼくは大声で叫んだ。

** 遠藤周作が留学した1950年（昭和25年）の1,000円は現在のいくりに相当するか、という下世話な問いにズバリ答えの出せるサイトがあるので、以下に引用しておきたい。ほぼ8倍前後という計算になるようだ。

(1) 消費者物価指数による換算『消費者物価指数年報』（総務省統計局 年刊【Z41-620】）による各年の指数：

・昭和60年版より 昭和25年=16.14 昭和60年=114.4

・平成19年版より 昭和60年=88.1 平成19年=100.3 114.4（昭和60年）÷16.14（昭和25年）=7.0倍

100.3（平成19年）÷88.1（昭和60年）=1.1倍 1,000円（昭和25年）×7.0×1.1=7,700円（平成19年）

(2) 戦前基準消費者物価（東京都区部）による換算

1767.6（平成19年の指数）÷219.9（昭和25年の指数）=8.0倍 1,000円（昭和25年）×8.0=8,000円（平成19年）

参照・引用 http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-102809.php

『作家の日記』 1950年（昭和25年）

ラ・マルセイエーズ号の主な寄港先

6月4日 午後10時 横浜発

10日 午前8時 香港着

11日 朝6時 香港発

12日 午後2時 マニラ 下船できず。

13日 6時 マニラ出帆

「考えてみれば、こんな旅は夢にも考えていなかった。船の最も下底で、中国人、黒人と雑魚寝し、くるしい暑さに耐えてジッとしているのは亦面白い」と『日記』にある。

15日 3時半頃、サイゴン（西貢）につく *16日 17日 サイゴン散策18日

「すべての判断は室の等級によって判定される」とある。

19日 午前8時 シンガポール着 夜9時 シンガポール発（上陸禁止）

23日 朝8時 コロンボ着

24日 海亦、海、ジブチまで4日間、印度洋をゆられる。

28日 朝、ジブチ近くなる。窓から初めてアフリカをみる。

29日 「この何もない街（ジブチ）ほど、心をゆさぶったものはない」と『日記』に書く。

7月1日 朝4時、スエズ着。7時に出帆、スエズ運河にはいる。

夜7時 ポートサイド着。

2日 地中海に入る。

3日 船は今、伊太利の南端クレタ島を右廻している。

4日 コルシカの前を通る。

5日 朝7時、窓から白い岩山の島がみえた。遂に到着したのである。マルセイユ着。

6月30日～7月2日 フランスに向う船内

『日記』に「クローデルの『人質』（◆以下、著者名、書籍名の邦訳は遠藤の記載のまま。原典を示していることから、著者名の読み間違いなどは逐一指摘しない。なお、この点を確認するには「町田市民文学館蔵 遠藤周作蔵書目録（欧文編）—光の序曲—」が役に立つ）をよみつづける」とある。

Paul Claudel, L'Otage, Paris, Gallimard, 1911. 1エ/218 町田市民文学館の図書番号

▶ 『作家の日記』のなかで一番最初に登場する書物がこれ。第1場（p. 9）に単語と登場人物を余白へ書きこみ。ただし、遠藤によるものかどうか不明。古書シールから日本で購入した本と知れる。全体的に汚れているがほかに書きこみなどは見当たらない。なお、『人質』はクローデル中期の代表作、大革命後のナポレオン治世下、成り上がり貴族が没落貴族の娘に横恋慕する姿をメインテーマとするもの。クローデル3部作（ほか『堅いパン』『辱められた神父』）と位置づけられる劇作である。

（注）1950年6月4日（日）に横浜を出帆して以来、はじめて「読書」の話題が『日記』に登場する。『日記』の書かれた場所はジブチ。7月1日にスエズに到着している。なお、スエズ運河を航行中、ストリンボリイ島の活火山の火柱を見つめながら、朝鮮戦争勃発の報に触れる。この時、遠藤は研究者としてでなく、作家として生きることを決意したとされる（◆「神の沈黙」を前に「なぜ」と問いかける信仰者としての己を意識したからで

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

はないか)。「赤ゲットの佛蘭西旅行」に「なぜ人間は戦争をせざるをえないのか、なぜ、再びあの善良な庶民たちは、さらに悲惨の中に突き落とされねばならぬのか。火柱は夜の中を高くのぼり、火の粉を散らばせながら落ちていきました。ぬれた甲板に靠れ(◆遠藤の小説のなかで、作中人物が「~に靠れ」とでてくると決まってその後には感情の大きな起伏をみる展開が用意されているように感じる。モーリヤックの静寂主義という批判に通じる遠藤の特徴的な描写パターンである)、ぼくは嗚咽をとめることが出来なかった」とある。あるいは「出世作のころ」にはこうある。「『きょう朝鮮戦争がはじまったよ』火種はまたあがり、火の粉をまき散らした。それは私の変化していく船での心境にほとんど決定的な一撃を与える夜だった。私は自分が大学の研究室に残るのはやめようと思った」。ただし、『日記』にはこれほどドラマチックな描写は見つからない。

7月5日 マルセイユ上陸

『日記』に「ネイラン師の迎えをうけた。昨日リヨンをたち今朝四時にマルセイユについたとの事。全く親切な方である」と記載あり。なお、このネイラン師とは、『おバカさん』の主人公ガストンのモデルになったネラン神父のこと。宣教にかかわる専門誌〈Miss〉の編集長経由で、日本人留学生をリヨンで受け入れる話を聞きつけ、ネランが賛同したことから、遠藤たちをマルセイユに迎えにきた。ちなみに、遠藤と初めて会ったのは、彼が叙階し神父になって10日目の出来事であった。

「35日の航海の間、私の気持ちもほぼ決まりかけていた。35日間の船旅は私にとって大学3年の勉強にも匹敵した。生まれてはじめて見るそれぞれの異国の風景、生まれてはじめて接するちがった国の人々。四等での生活。私はそれを通して仏文学の学徒になるよりは物を書きたいと思いはじめ、小説家の勉強をしようと思ったのである」『帰国まで—我が青春のリヨン』

◆この先の留学時代の読書は大きく分けて、下記の4つの流れに分類できる。

- (1) カトリック文学(フランソワ・モーリヤックを中心に、ジュリアン・グリーン、ベルナノス、シャルル・ド・ボスあるいはグレアム・グリーンなどのキリスト教作家を含む)。
- (2) サルトル、ボーヴォワール、カミュといった同時代のフランス文学・哲学ならびに人格主義 personalisme を唱えた「エスプリ」誌への関心。

「安岡章太郎は、遠藤は文学者ではなく思想家だ、と言った。確かに彼は自分の思想を小説によつて表現した作家である。日本文学に一番欠けてゐる作風の作家として、デビューの時から自分の裡に抱えてゐた思想を深め、発展させて一生を終へたのである」(大久保房男：デビューの頃の遠藤周作)と元編集者は書くが、遠藤は「思想」ということばをあまり好まなかった。安岡との対談で「僕の場合は思想などという高尚なものじゃなかった」と語り、「今日、無意識というテーマをぬきにして思想は語れるかもしれないが、文学や宗教の問題は語れない」(『私の愛した小説』)などと繰り返して指摘するからだ。

- (3) フォークナーや英米の探偵小説への関心。
- (4) サドへの傾倒。

7月8日 この日の朝、遠藤ははじめてパリに足を踏み入れる

『日記』に「ケスラー『ゼロと無限』（◆1951. 11. 19. にも言及あり／ Kommunismusとのからみで『(エッセイ) フランスの大学生』にも言及箇所あり）」について記す。

Arthur Koestler, *Le Zéro et l'infini*, Paris, Calmann-Lévy, 1946. 1エ／406

- ▶ 書きこみから、拷問をする側、される側の心理を追い、個人の善意の有り様を探りつつ、共産主義者の心情などに着目していたことがわかる。あわせて、キリスト教的なモラルとコミュニストとしてのモラルの差異にも注目。La fiction grammaticale「文法的虚構」の章（最終章）に「此の手法はGreenの〈栄光と勝利〉と同じである」と書きこみ。

(注) 「この書の登場人物はすべて架空である。しかし、彼らの行動を決定した歴史的な状況は現実である」というあり方を含めて、『ゼロと無限』は遠藤の初期作品の素材とのつながりが探れる一冊。スターリン時代のモスクワ裁判と大粛清を暴いたベストセラーとして知られる心理小説である。主人公ルバシヨフはかつての革命の英雄。しかし、現在の指導者に忠誠心を疑われ投獄される。最後はやってもいない罪を自白させられ、死刑台へと送られる。遠藤は、 Kommunismusの意義を問いかける書きこみを見返しに書きつけている。ただし「最後の描写は非常に下手」と最終ページに書きこみあり（主人公がこめかみに銃弾を受け、息絶えるシーンだが、ケスラーは主人公の内面に回り込んでこれを描写する方法をとっている）。なお、『作家の日記』には「ギイにかりる」とあるが、町田の文学館に所蔵されている本は、借りたまま返却せずにいつの間にか遠藤自身の本になったものだろうか。あるいは、別途、購入した本だろうか。この点、定かでない。

7月10日 9月までルーアンの建築家ロビンヌ家に世話になる

この町 (Rouen) の滞在を記念して購入したとされる本のうち、ペギーの『ジャンヌ・ダルク』は、町田文学館に所蔵なし（以下、所蔵の確認できない書物は「所在不明」と記す）。

『日記』に「キペンベルクの『R・M・リルケ』をかった」とある。

Katharina Kippenberg, *Rainer Maria Rilke-l'évolution spirituelle du poète*, Paris, Plon, 1942.

1エ／399

- ▶ 所蔵本にピンクのペンで2カ所下線が引かれているものの、ほかは読んだ形跡がない。ちなみにそのうちの一カ所は〈le poète doit le plus possible se tenir à l'écart de la vie vécue.〉という引用文。

7月17日

「ダニエル・ロップス『ナタナエルよ、汝も亦』をよみ始める」と『日記』に記す。

Henry Daniel-Rops, *Toi aussi, Nathanaël*, Paris, Plon, 1950. 1エ／614

- ▶ 見返しに署名したあと、下記のフランス語での書きこみ。本書の著者であるDaniel-Ropsとの昼食会に出向く予定（ロビンヌ夫人の厚情により設定される）とある。

J'ai acheté ce livre à Rouen le 10 juillet 1950 et M. Rops a l'intention de m'inviter au déjeuner avec plaisir, grâce à l'amabilité de M^{me} A. Robinne.

ルーアンに着いた遠藤が最初に記念として購入した本の一冊（7月10日購入）。Pierre Arrouが著

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

者 Daniel-Rops の精神的な道程を分析し、あわせて簡単な作品論を展開した「前書き」に書きこみと下線が集中。とくに、「現代的不安（ジッドの影響）」notre inquiétudeから「魂の闇」l'âme obscurへ、そして「魂なき世界」le monde sans âmeへと段階的に進行する本書の流れをArrouの導きに沿う形で確認。余白に1, 2, 3と読書用の道標となるようなペン書きをしている。また、1章、p. 46のla culture ajoute à l'âme, non par le sangという箇所「我々とは逆である事に注意」とわざわざ記していることから、汎神論の風土（=日本）を意識しながら読み進めていたとわかる。

7月22日

『日記』に「ロップス『意志論』を購入（23日にも言及あり「ロップスの『意志論』を扱ったが、一日の疲れのため早くねてしまう）」とある。

Henry Daniel-Rops, Vouloir, Paris, Plon, 1948. 1エ/611

▶ Le 23 juillet à Rouen 1950 Paul Shusaku Endoと購入日を記載。最初から3章まで、それと最後の章には目を通して。途中、50ページ分ほどアンカットのまま。見返しの余白には Attention! として以下2点のメモ書きあり。

p. 34 : l'vouloir dernière (le vouloir dernier の誤記) de Rimbeau

p. 35 : Térése (Thérèse の誤記) Desqueyroux. François Mauriac

さらに、Thérèse par François Mauriacとして以下の文章に*を施す。

Très souvent, nous nous donnons, après coup, une explication de notre action, alors que ce qui nous a déterminés, nous est obscur à nous-mêmes. (p. 35)

その脇に、après que la chose est faite「事がなされた後」と書きこみをしている。なお、読了後『日記』には「非常に常識的な論文」（7. 25.）と感想を吐露している。

同日購入した本として、『日記』に以下が記されている。フランソワ・モーリアック『パスカルとその妹ジャクリーヌ』

François Mauriac, Blaise Pascal et sa sœur Jacqueline, Paris, Hachette, 1931. 1エ/499

▶ フランス語の文法に関連した書きこみ、矢印での指示語のチェックがあることから、フランス語にまだ充分なじんでいない時期に目を通してることがわかる。章末や裏見返しに読みのポイントを丁寧に整理している（写真3参照）。

同日の『日記』に、「エミーリ・リドー『F・モーリアック』を買った。リドーとはどういう人か知らない」とある。

Emile Rideau, François Mauriac, Paris, éd. aux étudiants de France, 1947. 1エ/591

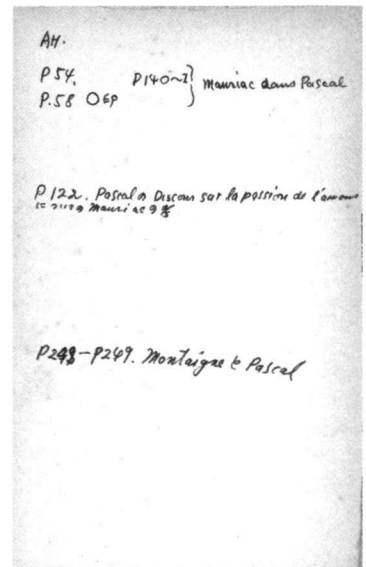


写真3 『パスカルとその妹ジャクリーヌ』の書きこみ

- ▶ Le 23 juillet à Rouen, Paul Shusaku Endoと購入日が記されているので、1日、『日記』とズレがある。90ページに満たない新書判サイズの本なのだが、遠藤はこの冊子を注を含めてかなり丁寧に読みこんでいる。Mauriacの Les Maisons fugitivesを重要作品と位置づける。『日記』に「教えられる所非常に多かった」と書く(7.25)。

7月24日

「一日がすぎ、亦一日が過ぎる。今日で丁度二週間、さりながら、もうこの街には一ヶ月も暮らしたような気がする」。異文化の暮らしに遠藤の疲労感がにじむ。この日、下記の2冊を購入している。

・ジェーヌ・ブイヌーズ『人の居る家』

Janine Bouissounouse, Maison occupée, Paris, Gallimard, 1946. 1エ/151

- ▶ 『日記』にある通り、原書にも「(1950.7.24.)に古本屋で購入」とある。なお数カ所下線はあるが、遠藤が引いたものかどうかはわからない。

・ブレンターノ『ジャンヌ・ダルク』

Fr. Funk-Brentano, Jeanne d'Arc, chef de guerre, Paris, Flammarion, 1943. 1エ/155

- ▶ le 24 juillet, 1950, A Rouenと見返しに購入日が記載されている。pp. 210-211の以下の箇所に線引きあり。〈De nuit, je suis couchée, ferrée par les jambes de deux paires de fer à chaînes et attachée moult étroitement d'une chaîne transversante par les pieds de mon lit, tenant à une grosse pièce de bois de longueur de cinq à six pieds et fermant à clef, par quoi je ne peux mouvoir de place〉。「昼飯後、古本屋で」購入とあり、「散歩からかえって拾いよみした。ジャンヌのルアンにおける生活を簡潔に、しかし要をえて書いてあるのは嬉しい」とある。

7月29日

「夜、ジッドとクローデルの往復書簡、所々よむ」と『日記』に記す。

Paul Claudel, André Gide, Correspondance 1899-1926, Paris, Gallimard, 1949. 1エ/226

- ▶ 下線から判断して、細かに読んでいるのは以下の日付の書簡。17 mars 1911, 15 janvier 1912, le 29 février 1912, le 19 mars 1912, le 2 avril 1912, 2 mars 1914 (日付の冠詞の有無は原典によった)。『日記』(7.30.)には「『法王庁の抜け穴』をめぐって激怒したクローデルの手紙はすごい。それに対するジッドの返事は痛々しい」とある。とくにクローデルは、男色を扱ったジッドの記述に対して「神の名にかけて、あんなことがどうして書けたのですか?」とはじまる書簡を1914年3月2日に出している。なおこの日の手紙の署名の前行には、お決まりの「さようなら」ではなく、「あなたの悲しめる友より」とクローデルは書いている。

8月1日

ベッツの訳した『マルテの手記』(所在不明)。『日記』に「三週間は一日のように思われたのだが、

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

ここでの三週間は、なんか年にもあたるものだ」としてフランス語 *Trois semaines, ailleurs, à la campagne par exemple. cela semblait un jour, ici ce sont des années.* を引いた後に、「それは今のぼくに相応しい言葉だ……」とある。

8月8日

フランス中部（中央山岳地方）の田舎について、「ベルナノスの『田舎司祭の日記』にでてくる村のようだ」とある。また、8月19日には「『田舎司祭の日記』を再読しはじめ」とある。

Georges Bernanos, *Journal d'un curé de campagne*, Paris, Plon, 1950. 1エ/132

- ▶ p. 3 On dira peut-être (….) que l'ennui est la véritable condition de l'homme の記述の余白に「ennuiについて」と書きこみあり。p. 116に作中人物の描き方に着目して、「curé de Torcyと田舎司祭のとの対立位置」と鉛筆書き。本書の購入日だが、18 Août 1950 Rouenとある（◆最初に読んだのは邦訳なのではないかと思われる）。同書について、以後、遠藤はあちこちで言及する。たとえば「神父たち」のなかではブレッソン監督の『田舎司祭の日記』の公開試写会にでかけ、その後、作品を読み返したとリヨン留学時代を懐かしんでいる（『全集13』pp. 213-215）。

8月24日

『日記』に「カミュの『異邦人』をよみつづく」とあるが所在不明。「この最後の章は素晴らしい。だが、私には、この男が何故再生の意志をもちえたかがよくわからない……」とある。

8月28日

「ピエール・アロン：ダニエル・ロップス論」の名があげられている。前出 (7. 17.), 《*Toi aussi, Nathanaël*》所収。「ロップスのシャルトルのカテドラルについて書かれた短いエッセイを拡げた」とも書かれているがこの本の書名など不明。さらに、「『われわれは、ギリシャ・ローマの美に、共感と治世と歴史によってつながるのであって、血によってではない』と言っている。私はロップスについてわからないものは、全くここにあるとあってよい。私たちは、その反対なのである」と『日記』に書く。美と血とのつながり。

8月31日

『日記』に「シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『穀つぶし』を読了した」とある。

Simone de Beauvoir, *Les Bouches inutiles*, Paris, Gallimard, 1945. 1エ/102

- ▶ お手製のカバーをかけていることからお気に入りの一冊。Shusaku Endo 28. Août. 1950. à Rouenと署名。見返しに「p. 79 haineの問題」とある。該当するのは、Quatrième tableauの台詞《*Il ne m'est plus permis de rien vouloir. J'étais une femme et je ne suis plus qu'une bouche inutile. Vous m'avez pris plus que la vie. Il ne me reste que ma haine.*》の箇所

最後のHuitième tableauの以下の台詞にも下線を施している。《*Louis: Vivants ou morts, nous*

sommes les vainqueurs.》

同じく、「哲学論文『第二の性』を読み始める事にした」とある。

Simone de Beauvoir, *Le Deuxième sexe 1 : Les Faits et les mythes*, Paris, Gallimard, 1949. 1エ/105

- ▶ 第3章のMythesの章に集中的な書きこみがある。『日記』にもあれこれと読後感が記されている。女性の心理を性 (sexe) を中心軸として分析している箇所に遠藤の書きこみが集中。p. 220に書きこみ。「初夜に男が無能である場合は、女は恨を抱く」。また、p. 221《la jeune femme à la fois veut et refuse le plaisir》の箇所に下線。ほかに、「男性は、女性の一面、母性的なものを恐怖する」(p. 247), 「肉欲の悲劇」(p. 264) などと欄外に多くのメモ書きがある。

Simone de Beauvoir, *Le Deuxième sexe 2 : L'Expérience vécue*, Paris, Gallimard, 1949. 1エ/106

- ▶ Formationの章に集中的な書きこみあり。本書については、『日記』(9. 1./9. 2./9. 4.) で細かく触れられている。たとえば「この論文には、一方ではフロイト的な方法で、人間の性的無意識根源に迫りつつ、他方では、肉と死を丁度、リルケの考察のような段階で考えている」(9. 2.) とある。

9月5日

『日記』に「ジュリアン・グリーン『幻を追う人』をよみはじむ」とある。

Julien Green, *Le Visionnaire*, Monaco, éd. du Rocher (Plon 1934の再版), 出版社不明. 1エ/332

- ▶ Le 24. juillet. Rouenとある。グリーンが『日記』に書いている作品の構想をいかにして小説化したか。その点に注目している。張りこみのメモあり。

Voici les changements que ce livre a subis depuis que je me suis mis en tête de l'écrire.

1. それはマリー・テレーズの手から離れねばならなかった。ほくは、この書物の1/3の末部あたりから、始めの計画は変へずにManuelに語らせようと考へた。然しながら、Marie ThérèseはManuelではないから、先のプランは、Manuel流に変わる事も、時にはありえよう。(ほくはプランが死んでも、作中人物が生きる方を好む。) 城の事が彼の心にかぶ。この城はManuelによって想像されたもので、そこで行はれる事件は彼のみが語るものでなければならない。
2. 城は空想の城である。さて今日まで、ほくはManuelが、真に(下線)庭園師として働くものとして考えてゐた。以下、写真4参照。

cf. *Journal 1 1928-1934*, Paris, Plon, 1938. 1エ/335

1930-1933年を中心に目を通して。グリーンの小説と重なり合う記述に関心をよせ、1932. 3. 20. の日記の余白には「visionnaire『覗く人』の素材」(9. 5. 参照)とメモ書き、1933. 4. 4. には「『階段』と自分(グリーン)の小説」などとジュリアン・グリーン創作の元となったとおぼしきエピソードに強い関心をよせている。

9月8日

『マルテの手記』(所在不明)に『日記』で言及する。

9月18日

「カミュの『ペスト』をよみ始める」と書く。

Albert Camus, *La Peste*, Paris, Gallimard, 1948. 1エ/174

- ▶ 完全に表紙がとれてしまっている。ただ、フランスで読んでいたのはこの本なのであろうが、下線や書きこみは見当たらない。『日記』に次の記述あり。「カミュの抒情方法 イ) 事件の場合、主観を入れない。非常客観に簡単に書く ロ) 風景の場合、主観的に抒情描写をする」。

◆ロの指摘は小説家遠藤の意識的なあり方でもある。たとえば、処女作『アデンまで』のラストシーンを思い出したい。

なお、タロー兄弟『われらの親愛なるペギー』の書名も『日記』にあがっているが、この本は所在不明。

9月21日

「マニーのモーリアック論をよんだ。これは非常に面白かった」とある。この先、この一冊は繰り返し『日記』に登場する。

Claude-Edmonde Magny, *Histoire du roman français depuis 1918 - Tome I*, Paris, éd. du Seuil, 1950. 1エ/455

- ▶ 4章から6章にかけて読書の跡はないが、残りの章にはきちんと目を通して読んでいる。小説の技法(日本の私小説との比較やプルーヴストとの関連など)や文芸批評の意義を問うような箇所には下線が集中。遠藤はのちにこの本を再読し、「胸にたまっている(フランスへの)不満」がなんであるかわかったという。いわく「ブルジョアは、手にはいるものは何も逃すまいとする。そして文学的世襲財産だって、貯えようとするのだ」(『日記』1951.1.29.)と。なお、モーリアック論の表題となった「静寂主義」(そもそもはカルヴァン派がルター派の信仰姿勢を指して用いた言葉。受動的な忍従を指す)というマニーの着眼は、遠藤が『テレーズ・デスケール』を解説する際に繰り返し指摘する読みの立脚点でもある。

9月22日

「ラセル・ペスパロフのカミュ論、『死刑囚の世界』をよんだ」とあるが、所在不明。

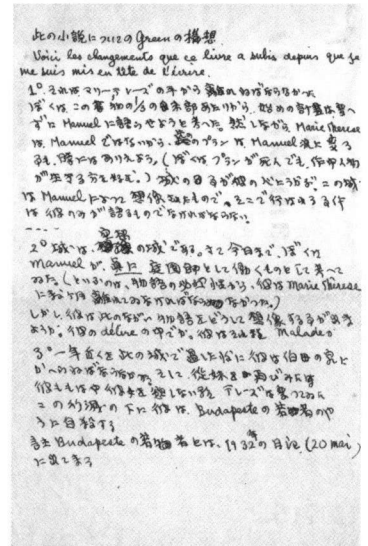


写真4 『幻を追う人』の張りこみメモ

9月26日

「夜、サルトルの『穢れた手』第一幕まで、よんだ」とある。9.28.には「サルトル『穢れた手』を読了。まだ、この戯曲は、ぼくにはわからない。もう一度、丹念によみかえてみたい」と書く。なお、10.16.には『穢れた手』に関する論文を読んだと『日記』に付記。

Jean-Paul Sartre, Les Mains sales, Paris, Gallimard, 1948. 1エ/637

- ▶ 全体に目を通してある。下線、書きこみ多し。見返しに、作中人物Hugoに触発されたとおぼしき書きこみと、p.188のTuer, mourir, c'est la même chose.に刺激されたと思われる書きこみあり。

10月 リヨン大学入学 パディ教授のもとで現代カトリック文学を研究するが、キリスト教との距離感を感じ、研究者ではなく作家として生きる事を明確に意識。

10月15日

「ジュリアン・グリーンの『モイラ』を読みあげる」とある。

Julien Green, Moïra, Paris, Plon, 1950. 1エ/340

- ▶ Shusaku Endo Oct. 1950. Lyonと署名。octobre 1950読了とある。遠藤は後半部にこの小説の「鍵」を見いだしている（具体的にはpp. 190-191, p. 208）。たとえばヨハネ第一の書からの引用部や「僕は原始キリスト教時代の聖徒のようになりたかったんだ」という箇所。「カトリック作家の問題」には「モイラの死体を雪に埋めた事に御注意ください。雪というもの、あのすべての穢れを夜、ひそかに浄化する雪のなかに自分の罪の象徴である女を埋めた事、ここにひそかな救いの路が予見されているわけです」（『全集12』p. 28）と書き、「私の文学」には、「雪のふる夜の描写はたんに『雪がふる』のではなく恩寵による人間の浄化、純白化という二重の意味がつけくわえられている」（『全集12』p. 379）と記している。「雪」「白」に象徴的な意味を嗅ぎとる。遠藤の初期作品に見られる色彩と作中人物とのいささか図式的な相関を連想させる。

10月17日

『日記』に「カミュの新作劇『正義の人びと』をよみ始む」と記す。

Albert Camus, Les Justes, Paris, Gallimard, 1950. 1エ/177

- ▶ 登場人物表に○×の印をつけ、P. C. (Parti Communiste : 遠藤は原書の余白に「共産党」と書かずにP. C. と書くのが通例)と登場人物との積極的なかわりの有無を弁別している。途中、questionと余白にメモ書き。最終ページには「18 octo 1950読了」とある。『日記』（1952. 2. 1.）に「『正義の人々』を再読し始める」とあるが、その翌日「第4幕から、よくわからなくなる」と困惑ぎみに感想を記している。

10月19日

「カミュの『シジフの神話』をよみ始める」とある。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

Albert Camus, *Le Mythe de Sisyphe*, Paris, Gallimard, 1942. 1エ/173

- ▶ Paul Endo 18 octobre, Lyon 1950と署名。書きこみ多し。たとえば「Dost（注：ドストエフスキーのこと）の小説の中で、人間が死を恐怖するのは死が痛いからだと言った事」「実存主義は、観念ではない。L'anéantissement（滅亡）を前にして人は呻く、この呻きこそ最も信頼できる」など。

10月24日

『日記』にジッド『狭き門』について触れている。

André Gide, *La Porte étroite*, Paris, Mercure de France, 1937. 1エ/319

- ▶ おびたしい書きこみ。単語の訳をこまめにカナ文字で余白に書きこんでいる。さながら、学生が購読の授業を前に予習用に未知の単語を多量に書きこんだ跡のようだ。実は、それもそのはずで、(リヨンの) 文科大学生のローベルジュ嬢に週2回、授業をしてもらうことに決めた本で、いうならば家庭教師用のテキストである。『狭き門』は『日記』によれば1950. 11. 5. に「再読了」とある。

この先、シャルル・デュ・ボスの著作、日記に数日集中している。なお、この時期から『日記』の日々の備忘録的記述が減り、読書日誌としての性格がさらに色濃くなる。

10月25日

「デュ・ボスの田園交響楽論をよみ、非常に教えられる所があった」と書く。

Charles du Bos, *Le Dialogue avec André Gide*, Paris, Au Sans Pareil, 1929. 1エ/257

- ▶ 「田園交響楽論」は2章にあたる。自身への課題（作中人物の描写法など）をメモした箇所が興味深い。読書の跡が見られるのは全体の半分程度。「p. 22のGideの告白に注意せよ」と扉裏にメモ書きあり。

10月27日

「デュ・ボスの『第一の対話』をよんだ」（◆上記、『アンドレ・ジイドとの対話』の第一話1925. 5. 23を指すものと思われる）とある。さらに、『日記』には「何故かしらぬが私には、もうジッドはかつてのような影響と感動を呼びおこさない。彼のとくものが、非常に技巧的でありすぎるように思われるためかもしれない。私はもっと生々しいものを……」とある。

同日、「ベルナノスの『ある犯罪』を読み始める」と記述する。

Georges Bernanos, *Un crime*, Paris, S. E. P. E., 1947. 1エ/62

- ▶ 『日記』（10. 27.）に読書開始とあるが、特筆すべき書きこみはない。見返しにサインがあるものの、この署名は遠藤のものではない。なお、この後『日記』に「この二、三日をシャルル・デュ・ボスをよむ事の中に送っている。私の今年一杯の計画のもう一つは、肉の問題を徹底的に調べる事である」と記す（◆たとえば、この一人称を明示した「私の」以下の文言からして、『日記』をいずれ公にするこ

とを意識した書き方ではないか)。

11月6日

「デュ・ボスは全く、頭が疲れるほどむつかしい」と記した後、「シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『肉欲論』をこの二、三日よみつづけている」と『日記』に書きつける。

* Le Deuxième sexe(前出 8. 31.) の章を指す。

(11月12日：『肉欲論』をよみつづけている／11月13日：ド・ボーヴォワールを続読)。

11月13日

「夜、デュ・ボスの1924年の日記をすこしよむ」とある。

Charles du Bos, Journal 1924-1925 Paris, Corrêa, 1948. 1エ/260

▶ 本書に下線や書きこみがあるのは、順に1924. 1. 2., 11. 20., 11. 23., 12. 3. の4箇所。

11月16日

「ルーアンで懇意にしていたスシイ神父からもらった二冊」として下記の書物の名があがっているが、一冊は所在不明。

A・D・セルティランジュ『創造の観念』(*著者名のA・DはA・Gの誤記)。

A. -G. Sertillanges, L'idée de création et ses retentissements en philosophie, Paris, Aubier, 1945.

1エ/654

▶ ルーアンで懇意にしていたスシイ神父からもらった本(1950. 11. 16.)。下線と書きこみはあるが特段、注目すべきものは見つからない。

R・P・E・ドネー『カトリック教徒とは何か』(所在不明)

同日の『日記』にはさらに、「デュ・ボスの日記、1928年の9月12日は非常に重大なものである」とある。

Charles du Bos, Journal, Tome IV 1928, Paris, Corrêa, 1950. 1エ/263

▶ Charles du Bosの批評家精神が強く感じとれる記述やGideに言及した箇所に書きこみが集中している。1928年の8月～9月には下線や書きこみが多い。たとえば、p. 165の à opter entre la justice et la charité「正義と慈愛の二者択一」という箇所に下線を施し、その脇に「カトリック批評家の義務(読者に対する責任)」と書きつける。カトリック作家として、文学的な正義と宗教的な慈愛とをいかにバランスよく保つか、モーリヤックが宗教的危機の時代に懊悩したテーマであり、遠藤の追い求めたそれでもある。

このあたりから、『日記』に読書の予定が書き込まれるようになる。手当たり次第ではなく、

計画的な読書が実践されてゆく。

11月22日

『日記』に「朝、デュ・ボスの1928年の日記の主要部分を殆ど読み上げた」と書き、さらに「1924年の日記をよまねばならぬ以上28年の日記は他日ゆっくり再読せねばならない。28年の日記はジッドとの個人的なあつれきを知る他には、既に、救われてしまったデュ・ボスである以上、私には、さほど興味をひかなかった」と書き添えている。この後、数日間デュ・ボスを読んでいる。

11月25日

「午前中、デュ・ボス1924年の日記（原罪の部）をよみ始める事」「午前、セルティランジュ（前出：11. 16.）と、『キリスト教的ヒューマニズム』（所在不明）をよみ、午後の準備をした」とある。

11月27日

「計画にしたがって、私は朝、モーリス・エヌのサドの内〈黒い小説〉をよみ始めた」と書く。

Maurice Heine, *Le Marquis de Sade*, Paris, Gallimard, 1950. 1エ/374

▶ 引用されているサド侯爵の日記『ソドムの百二十日』や「ボンボン事件」の名で知られる史実の具体的な記述に関心をよせている。あわせて、Sadeの容貌に触れた箇所の下線を施している。なお、遠藤のサドへの関心は、「王制封建主義と通俗化したキリスト教の腐敗に血みどろになって反抗し、新しいモラルを見つけようとした人」（澁澤のいわゆるサド裁判の際の特別弁護人陳述より）という位置づけから生まれているものと考えられる。

11月29日

この日から、12月上旬にかけて、前出のシャルル・デュ・ボスの『日記』をこまめに読んでいる。ちなみに、「私が現在検討しているのは、初期のシャルル・デュ・ボス——つまり、彼が真理探究に信を置いていた時代の態度と思想である」と『日記』（12. 2.）に書かれている。

12月4日

「サルトルの『文学とは何か』の中に、特に「現代」誌宣言をよみ始めた」とある。

Jean-Paul Satre, *Situations 2*, Paris, Gallimard, 1948. 1エ/638

Présentation des temps modernesとQu'est-ce que la littérature?の論考に下線、書きこみをしながら目を通して。後者の論文中の「作中人物の自由」の問題は遠藤に大きな影響をあたえたはず。鉛筆やペン（青と黒）など複数の筆記具による下線と書きこみ。何度か繰り返して読書している証左と思われる。『日記』には「非常に考えさせられる。この事については二、三日中にノートにかいておきたいと思う」（12. 4.）とある。

12月5日

「モンテルラン『サンチャゴの主』を読了した」とあるが、この本は所在不明。「夜、サルトルの『文学とは何か』を続読する（注：12.4.）。とにかく、これは面白い」と書かれている。

12月10日

『日記』に以下の記述。「シャルリ・ギヨの『現代のアメリカ作家』は小さな小冊子であるにも拘らず、ぼくにアメリカ文学に対する全く驚異的な眼を開かせている」。

Charly Guyot, Les Romanciers américains d'aujourd'hui, Paris, Labergerie, 1948. 1エ/364

▶ この先、アメリカ文学を読む契機となった一冊、かなり丁寧に読みこまれている。以下、本書内の遠藤の書きこみのいくつかを簡条書きで示す。

- ・見返し「Denesierと生 p. 20」と書きこみあり。
- ・p. 9の1行目～8行目まで横線。Créations épiques d'un Saint-Exupéry ou d'un Marlauxの箇所
に下線と“?”を施す。
- ・p. 17 上段余白Dreiser Edith Wharton Howells Henry Jamesへの反逆と書きこみ。下から11行目
Elle ne doit servir～individu représentatifまで横線を引く。
- ・p. 22「Sherwood Anderson」と書きこみ。
- ・p. 24「Many Mariage(1923)における性」と書きこみ。記事周囲に横線。
- ・p. 25「アメリカ現代文学の方向」と書きこみ。
- ・p. 49 フォークナーの章に「『音と怒』の新しい小説形式」と書きこみ。

序章のPoint de Départ, William Faulkner, Ernest Hemingway, John Steinbeckの章に下線、書きこみが集中している。手製のカバーをつくって本をくるんでいることから、遠藤の本書への愛着が感じられる。固有名詞に何か所か下線を引き、アメリカ現代文学の一連の流れを作品名や作家名を指標に読みすすめている。Dreiser, Faulkner, Hemingway, Steinbeckに触れた箇所に特に強い関心を示している。なお、『日記』にこの小冊子から関心を引いた言葉をいくつか書き写している。

12月15日

「ギヨの小冊子に刺激され、フォークナーの小説をよみ始めた。今日、よんだのは『マーティノ博士]である」とある。

William Faulkner, Le Docteur Martino et autres histoires, Paris, Gallimard, 1948. 1エ/288

▶ Shusaku Endo Decem 1950 Lyonと署名。短篇のLe Docteur MortinoとEllyに目を通して
前者に関して「決して感心した程の小説ではないと思った」と『日記』（12.15.）に感想を記す。

12月16日

「フォークナーの『音と怒り』をよみ始む」とある。どうしてフォークナーを読むのか、その理由も簡条書きで『日記』に明示されている。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

William Faulkner, *Le Bruit et la fureur*, Paris, Gallimard, 1949. 1エ/291

- ▶ 序文にいくつか細かな書きこみ。サルトルのモーリヤック批判の際に使われた「作中人物の自由」という言葉が本書のp. 13の欄外に記されているし、同日の『日記』にもこの言葉が登場する。あわせて、「ここで、ぼくが学びたいのは言うまでもなく小説の新しい形式である」と書いている。なお、この先も同じだが、フォークナーやグレーム・グリーン作品を読む際には、映画的な描写法とおぼしき箇所に注意、関心を向けつつ、読書を進めている節がある。

12月18日

『日記』に「デュ・ボスの『文学とは何か』をもし、単独でよめば、ぼくにはさほどの興味は湧かなかったであろう。しかしここに同じ題でサルトルが『シチュアション』にかいたものを並行してよむ事によって、ぼくの心は運動しはじめる」とあり、サルトルの論考「文学とは何か」と重ねつつ、デュ・ボスの文学論を読み進める読書スタイルが開示されている。

Chareles du Bos, *Qu'est-ce que la littérature? suivi de Hommage à Charles du Bos*, Paris, Plon, 1949. 1エ/258

- ▶ なかでもDaniel-Ropsが書いた*La Compréhension de Charles du Bos*を細かに読んでいる。

12月31日

クロード＝エドモンド＝マニー著『アメリカ小説の年輪』の名が『日記』に登場。

Magny Claude-Edmonde, *L'Age du roman américain*, Paris, éd. du Seuil, 1948. 1エ/454

- ▶ 本書内に「Steinbeckの新しい汎神性／ギリシャ悲劇的なもの」と書きこみ。映画の手法と小説の技法との比較研究で知られるこの書物の読書を機に、一気にアメリカ小説に傾倒（遠藤はタイトルの*l'age*を「年輪」と訳しているが、通常なら『アメリカ小説時代』となる）。後半に下線、書きこみが集中。なお、著者に対しておおむね好意的な書きこみが多いなかであって、Magnyの批評の弱点（二人の作家を「BはAと同じではない、故にAは」と同じ分析パターンで批評する点や、「結論が同じ着地点になる」など）を指摘した書きこみもある。なお、『日記』では、マニーが「アメリカ小説と映画の関係を、少し、誇張もあるが鮮やかに分析していく」（1951. 1. 1.）手ぎわを褒め、さらに「『アメリカ小説の年輪』のデクーパージュを、全く、憑かれたように今日よみ上げた。ぼくが、アメリカ小説から学ぼうとしたものの一つ、技術的な面はここであますことなく研究しつくされている」（1951. 1. 3.）として本書を讃える。

1951年（昭和26年）

1月1日

- ◆ この日書きつけた「ぼくが、やっとみつけた自分の文学方法、罪の根元に遡る事」という『日記』の文言は、遠藤文学の根本的なテーマそのものなのではないか。

1月9日

『シチュアション』の中のフォークナーについての小さなエッセイをよむ」とある。

Jean-Paul Sartre, Situations 1, Paris, Gallimard, 1947. 1エ/635

- ▶ フォークナーについての論考は本書内にふたつある（フォークナーの『サートリス』と「フォークナーにおける時間性」）が、目を通した痕跡があるのは前者の評論だけ。

『日記』に「ジョセフ・シュニユの『ガブリエル・マルセルの劇、その形而上学的意義』をよみながら」云々と書き、自らの行動力を責めるような文言を添える。「一体何故何もできないのか。お前はアフリカに行く事はできないのであるか。アフリカに住みたいという願望、初めてアフリカを見た日の朝のむきだした山、木一つなく、白陽がギラギラと光っていた。街は死んだようであった。その時の身の疼き……」（◆ジプチの強烈なイメージとこうしたモノログとが時間をかけて遠藤の頭のなかで醸成されて、やがて処女作『アデンまで』の砂漠のシーンが生まれたのではないか）。

Joseph Chenu, Le Théâtre de Gabriel Marcel et sa signification métaphysique, Paris, éd. Montaigne, 1948. 1エ/203

- ▶ 1章から3章まで読書の痕跡あり。アメリカ小説や映画・芝居を視野に入れ、具体的には上記のサルトルの評論の影響を引きずる恰好で、Faulknerの作品などとの比較を念頭に読書をしている。

1月17日

「グリーンの日記をよみ始める。ぼくが提出した二つの問題（1月15日の『日記』から「彼の作中人物の恐^(ママ)迫観念の分析」と「小説技法の研究」を指す）に対する手がかりは未だない」。なお、この先、数日はグリーンの『日記』を読み続ける。

Julien Green, Journal I 1928-1934, Paris, Plon, 1938. 1エ/335

- ▶ 1930-1933年を中心に目を通して読んでいる。グリーンの小説と重なり合う記述に関心をよせ、1932. 3. 20. の日記の余白には「visionnaire『覗く人』の素材」（1950. 9. 5. 参照）とメモ書き、1933. 4. 4. には「『階段』と自分（グリーン）の小説」など余白に書きこみ（グリーンの小説に階段の場面が何度か登場することは知られている）、グリーンの創作の元となったとおぼしきエピソードに関心をよせている。ほかに、1932年12月の箇所に下線等が集中。とりわけ、グリーンが「死への恐怖」に触れた箇所。遠藤の『日記』から、本書をデュ・ボスの『日記』と比較しながら読もうとしていたことも知れる。いわく「ボスの日記は、彼の、評論の草稿である。彼は評論をかくために、日記を書いたのだ。一方、グリーンの日記は、彼の内部的な苦しみから逃れる、はげ口だったのである。日記をかく事によって、日常的な逃避を試み、それによって、身の破滅を逃れたのである」。グリーンのそれは遠藤の心情に重なる。

1月21日

「グリーンの日記、第2巻をよみ始める。今日は1935年の日記をよみ終わった」と書く。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

Julien Green, Journal II 1935-1939, Paris, Plon, 1939. 1エ/336

- ▶ Greenが他の作家に触れる記述のある箇所、あるいは、すでに記載された話題が再度取りあげられ強調された箇所など注目すべきポイントとなる部分に丸印をつけている。遠藤は『日記』に「グリーンが結局戦ったものは〈宿命〉であった」と書く。

1月23日

『日記』に「ロップス先生から署名入りの著作4冊を送っていただく」とある。ちなみに、遠藤のダニエル・ロップス評。「ロップスは作中人物の魂の底には、各々、その心理を超えてひそかに存在する神の痕跡がある。この神のひそかな痕跡をカトリック作家は発見せねばならぬ」と分析（『全集12』p. 27）。

1月24日

「グリーンの日記、第3巻を読み始む」。

Julien Green, Journal III 1940-1943, Paris, Plon, 1946. 1エ/337

- ▶ 数ヶ所に丸印をつけている。ただし、この時期の遠藤の関心はグリーンには向っていないようだ。事実、『日記』にも「死や夢を考えているグリーンというよりは寧ろ戦争とヒューマニズムを考えるグリーンである。そしてそのときのグリーンはもはやほくから遠く離れてしまう」と記している。ただし、その後もときに応じてグリーン『日記』（ただし邦訳だと思われる）を繕っている。「今でもジュリアン・グリーンの日記と荷風山人のそれは枕頭において老齢、眠りが中断して次の睡魔を待つ間に気ままに頁を開き、再読、三読している」（『小説技術についての雑談』『全集13』p. 418）と記しているからだ。

1月25日

『日記』に「外部への関心がない」と明記。精神的な苦悶が見てとれる。いわく「ほくにとっては、すべて外部の世界は砕けたガラスの破片のようなものにすぎぬ。ほくは外部に何の興味も持てぬし、又、何の関心もない。外部に身を投じる生の路は、ことさらに心を惹かぬし、それはもう自分の人生とは無縁なものである事もはっきりしはじめてきた」。しかし、その「無関心」をよしとしているわけではない。「今ほくを支えているものが、波紋のように変化する。影と光がたゆらぐ」と微妙な心情も吐露する。

1月28日

「スタインベックの『勝敗のわからぬ戦』をよみだす」とあり、2月3日に読了と『日記』に記されている。

John Steinbeck, En un combat douteux..., Paris, Gallimard, 1940. 1エ/667

- ▶ Paul Endo 1951 Janvier Lyonと鉛筆で署名。主だった下線ならびに余白への書きこみはpp. 118-

119, pp. 202-203, p. 247のみ。ただし、見返しには「この作品の真の主題、真のヒーローは」で始まるフランス語でのコメント。Le vrai sujet, le vrai héros du livre, ce n'est même plus la destinée individuelle de Mac ou de Jim, mais l'histoire de leur tâche commune, cette grève de cueilleurs de fruits dont le roman est l'Iliade, derrière, encore au-delà nous voyons se profiler une aventure plus vaste, plus impersonnelle encore dont elle n'est qu'un épisode. Ici Marc et Jim ne sont plus que les meneurs du jeu, en même temps que les observateurs privilégiés. (pp. 202-203のDocとJimの会話：13章にあたる)。最終ページに1951 3 janvier夜読了とメモ書き。『日記』には、「スタインベックの『勝敗のわからぬ戦』の中には一人の医師が出てくる。この医師は、マルローやカミュの『ペスト』の医師に似ている」(2. 1.)、「群集心理を——スタインベックはそれを人間＝群衆となづけている——みごとに解剖している」(2. 3.)といった感想を書きつけている。なお、留学して約半年(1951. 1. が購入日)、この時期からフランス語でのメモ書きが増えてくる。

1月29日

「フランスに来て、何か知らぬが、胸にたまっている不満は今、マニーの『1918年以後のフランス小説』を読んでいる内に見出した言葉によってハッキリとわかった。ブルジョアは、手にはいるものは何も逃すまいとする。そして文学的世襲財産だって、貯えようとするのだ」と書く(前出 1950. 9. 21. 参照)。

1月31日

以下、当日の『日記』より抜粋。「この日記を再びよみかえしてみても烈しい自己嫌悪に陥った。少なくとも、この日記にあらわれているものは「僕」ではない……。もう一度何故もっと率直に自己の生に突入しないのか。ぼくの前で僕を開花させるために待っている諸々の事物……。 (中略) 肉欲と残酷の秘儀(それ故にぼくはサドに心ひかれ始める)はこの短い小説(注：スタインベックの『大なる谷』を指す)の中であきらかである。ぼくの場合——モーリアックの影響の下に——肉欲と罪とは切り離されない——ドストエフスキイの影響の下に——罪は人を啓示する最も大なる深淵である——そしてこの戦争の影響の下に——罪と残酷とは僕から切り離されなくなった。ぼくは今日、情欲と残酷との関係を調べる事に心ひかれているのである。この点、情欲を「所有」からながめようとするサルトルや、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの本はぼくに教えてくれるものが多かった」と、これまでの読書からの「影響」の連鎖を簡略にまとめている。

2月3日

『日記』より。「ぼくの世界観はやっと一つの結論に到達しようとしている。地上には色々な原素がある。各人間は各原素から生きている。ぼくの原素は、ある一つの植物や、冬眠する動物、それから湿った土に通じる。しかしそれは、例えば行動的な人間とは本質的に通じない。そして各人はその異なった原素の宿命から逃れる事はできない。動物たちが闘うようにちがった原素の人間は孤独であり、

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

又闘わねばならない。それは世界原初の暗い沼に似ている。ぼくはこれを今日夕飯をくいながら考えた。その途端いいようのない生のくるしさが胸にこみあげてきた」(◆同年4月5日の『日記』にこの記述について遡及する言葉あり。キリスト教との齟齬、違和感が色濃い。と同時にこの頃、肉体の変調の予兆があったのではないだろうか。というも、「ぼくは、自分がこの国で死ぬのではないかと考えた。(中略)この自分の疲労が決して『肉体的なものではなく』、この月の初めに結論した自分の人生観のせいである事をよく知っている」(『日記』2.8.)とあるのだが、わざわざ『日記』に「肉体的なものではなく」と自らに断りを入れているのが妙だ。ちなみに、はっきりと自身の異変を記しているのは、2月18日の以下の記述。「左首にのりいれき(注:頸部リンパ節結核の古称。少・青年に多い疾患であったが、最近ではまれ。結核菌が顎下部・側頸部・鎖骨上窩などのリンパ節に侵入し結節を形成。次第に乾酪化、化膿して瘻孔を作る)の大小を発見する。この国で死ぬ日がくるかも知れないとしみじみ考える。(中略)病の中で、ぼくは死の恐怖が、ぼくの汎神傾向より、もっと強いものである事を発見した」とある)。

2月6日

「ピエール＝アンリ・シモンの『青い葡萄』をよみ始める」と書く。

Pierre-Henri Simon, Les Raisins verts, Paris, éd. du Seuil, 1950. 1エ/658

- ▶ 遠藤の初めての長篇小説『青い小さな葡萄』を思わせる表題。少なからぬ影響を受けているはずだが、町田市民文学館所蔵の本に書きこみはない。見返しに書かれた購入日は1959. A Parisとされているが、『日記』(1951. 2. 6.「よみ始める」/1952. 7. 24.「再読し始める」)の記述とあわない。実際に読んだ本とは別に買い替えたのかもしれない。

2月10日

『日記』に「『モイラ』を再読し始める」とある(前出1950.10.15.)。

2月15日

「グリーン『もしもわたしがあなただったら』をよみ始める」と記す。

Julien Green, Si j'étais vous, Paris, Plon, 1947. 1エ/339

- ▶ Greenへの不満をぶつけた書きこみが12章と13章にある。つまり、「少しも面白くねえ」と。その後、Greenと遠藤との対話形式で、とぼけた書きこみをプラスしている。『日記』にもこんな感想を記す。「病気のため中絶していたグリーン『もしもわたしがあなただったら』をよみつづける。けだし面白くない。『モイラ』のあの生き生きとした描写が何処にもない」(2.24.)。遠藤は、この作品が空想小説でありながら、読者に読みの努力を強いる悲劇である点に不満を持っていた(『日記』2.26.)。なお、本書と『ヴァルーナ』を指して「文学的圧力の落ちた小説」(『全集12』p.52)と手厳しい批判を書いている。

2月20日

アンドレ・ジッド死去。『日記』に「夜、アンドレ・ジッドが死んだ、ぼくが病気の時、彼は病気であった。ぼくがなおった時、彼は死んだ」と書く（ここ数日、遠藤は死の恐怖に駆られていた。『日記』（2. 19.）には「病の中で、ぼくの死の恐怖が、ぼくの汎神傾向より、もっと強いものである事を発見した」と書く。無論、ここで遠藤の言う「死の恐怖」とはキリスト教としても「死」を指す）。

2月21日

「ピエール＝アンリ・シモン『告発された人間』をよみ始める」。

Pierre-Henri Simon, L'Homme en procès, Neuchâtel, Baconnière, 1950. 1エ/659

▶ 署名は Shusaku Endo 1951 Franceとある。「ヒューマンストの交代」la relève des 〈humanistes〉と題された1章と、続く、マルローとサルトルの章に書きこみと下線が集中している。とくに「死への挑戦」と副題のついたマルロー論には書きこみも多い。「最後は一人きりなのだから、ぎりぎりまで分析していけば人間の意識の根柢にあるのは深い恐怖だ」（p. 30）という箇所、あるいは Une vie ne vaut rien, mais rien ne vaut une vie. 「人生はなにものにも値しない、だが、人生に値するものはなにひとつない」（p. 32）といった箇所に下線。1940年代の文学のあり様に関心を寄せている。なお、マルローに関するこんな書きこみが見つかる。「MalrauxでimportantはMalraux美学のみ」（p. 52）。ただ、『日記』には、ここに記された作家論は「概論に近くて、それ程勉強にならなかった」（1951. 2. 24.）と書いている。

2月28日

「フロイトの『性の三つのテオリイ』を読む」とある。

Sigmund Freud, Trois Essais sur la théorie de la sexualité, Paris, Gallimard, 1949. 1エ/306

▶ 『日記』にこの本の面白いのは「神経病と性の関係」と書き、あわせて「サディストは常にマゾヒストであるという説は少し考えさせられた」と感想を書きつけている。下線や書きこみから、サド・マゾに関する記述、幼年期（とりわけ少女）の性欲にかかわる記事、あるいは性欲にかかわる親の影響といった箇所に関心をよせ、あわせて夢と無意識の関連に興味を引かれているとわかる。3. 1. の『日記』に「ぼくを啓示してくれるものは（少なくとも）今は、性に関する本である」と書く。なお、1952. 3. 25. と3. 26. の『日記』にも同書に関して似たような感想を書きつけている。

3月～4月 アルデッシュに足を伸ばし、フォンスの井戸を見る。「このほの黒い、人の叫び訴えるような声がきこえる井戸の底に、ぼくは、人生の一つの投影を見に来たのだ」（『日記』3. 23.）。引きつづき、『フォンスの井戸』の草稿を終える（4. 1.）。『フォンスの井戸』をかきつづける（4. 29.）。この井戸は、抗独運動者が虐殺者を遺棄した場所。それをテーマに実質的に初めての小説を書く。遠藤の処女小説とされる『アデンまで』に先立つ作品である。

3月26日 原民喜自殺（13日）の報を受ける。

3月10日

「ベルナノスの『ウイヌ氏』と、フォークナーの『音と怒り』はどんなに頑張ってもよみ上げ、3月中の収穫にしたいと思う」と『日記』に記した後、早速、読書を開始。「『ウイヌ氏』の難しさは、俗語の濫用にあるのではない。関係代名詞につづく描写の一種不明瞭な暗示、饒舌には、全くやりきれない」と不満を書きつける。

Georges Bernanos, Monsieur Ouine, Paris, Plon, 1946. 1エ

／130

- ▶ Paul Endo Lyon 1950と署名。作中人物の描写法に関して独自の図表（写真5）を書き込んでいる（p. 16）。これは作品への強い関心というよりはベルナノスの描写法が難解であるために、それを分析する意味でのメモだと思われる。また、見返しに、Magnyの現代文学における悪魔（サタン）に触れた箇所についての書きこみをしている。これは3.8.にマニーの「ベルナノスの『ウイヌ氏』論」（雑誌の「悪魔」の特集号）に目を通してのことから。

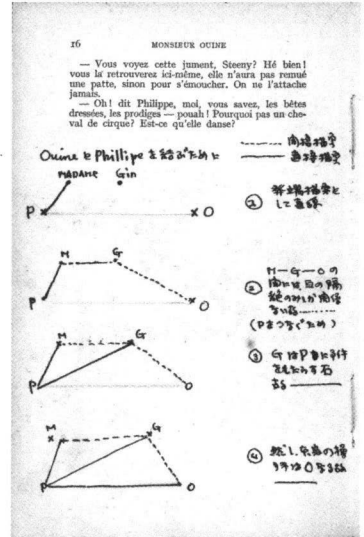


写真5 『ウイヌ氏』

3月14日

『日記』に「一昨日送って来た日本語訳の『サンクチュアリ』（聖所）を読み始めた」とある（所在不明）。西川正身・竜口直太郎訳『サンクチュアリ』（昭和30年：新潮文庫）であろうかと思われる。

3月15日

こんな弱音が見える。「フランスに来て、ぼくは何もえなかった気がする。浸れないのだ。絶えず、胸の中に、一つの協奏曲がなくなっていなければならないのに、多くの不協和音がかなでられるのだ」。

3月31日

「ぼくは『ユージェニ・ド・ゲランの生と死』という本を机にひろげては時々、目を上げて霧雨を見る」と書く。

Geneviève Duhamel, La Vie et la mort d'Eugénie de Guérin, Mayenne, Bloud & Gay, 1948.

1エ／266

- ▶ 時系列にそって、伝記をつぶさに追っているのが下線や余白の書きこみから見て取れる。ただ、美談としてまとめられた感のある恋愛については「本間カネ。然シコノ話シハ！」（p. 183）とちゃちゃをいれる。

4月5日

『日記』に「エドモンド・マニーの『ランボオ論』をよんで……」とあるが具体的な書名、章名は不明（雑誌の記事か、さもないければ《Histoire du roman français depuis 1918 - Tome I》のいずれかの章を指すのだろうが、同書に「ランボオ論」はない）。なお、この日、この論に刺激される形で、遠藤の未来の道行きを暗示する記述が『日記』になされる。「少なくとも、ジブチにおける、ぼくの決定的な印象は〈原初的〉という事であった。今日、フランスにきて8ヶ月、アフリカに対するぼくの願望は日を追うて烈しくなる。何故、ぼくはフォンスの井戸を見た時一つの戦りつを感じたか。妻を殺した男を裁判所で見た時、それは、すべて『地獄の一季節』のランボオと関わりあるように思われる。つまり、救済前の世界に。つまり絶対に直接ふれてみたいという願望なのだ。絶対とは、その時、2月3日にぼくが、くるしく書いた日記に一部分あらわれている。基督教が、犯した罪の一つは、絶対を、一つの秩序化した事だ。絶対は、そんな秩序ではない。それは混とんとした無秩序であった」。

4月8日

「少し『田舎司祭の日記』を読み」とある（前出 1950. 8. 8.）。

4月9日

「黄昏、よむともなしに、ソフォクレスのギリシャ悲劇をひろげ、盲目のエディプ王のことをぼんやり考えていた」とある。

Sophocle, Théâtre de Sophocle, Paris, Flammarion, 1940 ou 1959. 1エ/664

▶ 1951. A Lyon, avrilと購入日を記載。Œdipe roi, Œdipe à coloneの二篇にかなり関心を寄せていたようで、下線が集中している。『日記』（4. 12. ならびに4. 13.）に細かな言及箇所がある。たとえば、「エディプ王とコロンのエディプの相違は前者が〈宿命に抗おう〉としてそれに闘うのに対し、後者は〈宿命に従おう〉とする者がそれを妨げる力と闘う所にある」（4. 13.）。

4月12日

「フォンスの井戸」について『日記』に「方法としては、フォークナーの技法をまねるより仕方あるまい」と書いている。あわせて、4月15日、16日の『日記』にも「フォンスの井戸」に言及あり（◆ここで遠藤が言う「方法」がいかなるものかにわかには判定しがたいが、『死海のほとり』は、フォークナーの『野生の棕櫚』のdouble novel「二重小説」をアレンジしたものだ。なお、この時点で直近でフォークナーに触れていたのは日本語訳『サンクチュアリ』（聖所）（3. 14.）について。その日の『日記』には「映画手法とーがいはいえぬ暗示、雰囲気、ちみつな計算がフォークナー小説の中では、一体となっている」とある）。

4月14日

「エドモンド・マニーの、マルタン・デュ・ガール論をよみ始める（4. 18. 読了）。段々と、彼女の方法の欠点もみえてきた」とある。これは前出《Histoire du roman français depuis 1918 - Tome I》

の最終章を指している。

4月19日

「マニーのスタインベック論読了、これはマニーの批評方法の弱点をよくあらわしたものである」と『日記』に記載。具体的には《L'Age du roman américain》の第2部4章を指す。なお、同日、19歳で咯血した夜を思いおこしながら、いささか安っぽい小説もどきの筆であるが、こんな弱音を吐いている。「どこの国、どこの街に来てても、ぼくの心の底のかなしみはきえない。かなしみ、生に対するかなしみを、単にかなしみと言えるだろうか。突然、恐怖がぼくの胸をしめつけた。眩暈したようにぼくは椅子に崩れた……」。

4月20日

「クロード・モーリアックの『地獄への神秘』（マルセル・ジュアンドー論）を読み始める」と書く。
Claude Mauriac, Introduction à une mystique de l'Enfer-L'Œuvre de Marcel Jouhandeau, Paris, B. Grasset, 1938. 1エ/476

▶ Paul Endoと記名。著者クロードが対象（父親はFrançois Mauriac）に向かう姿勢に対して、率直な感想を書きとめている。3章には「此の章は大変面白い」と書きこみをしているが、冗漫な書き方に不満も漏らす。とくに前半は「罪の問題をどう延長してくれるか」という遠藤の読みのポイントとずれているようだ。たとえば、p. 45に感想を書き付ける。「長たらしく、ガラガラ書くなよ。Chap Iの中で問題なのはla folieの問題だけぢやないか」。あるいは「此の解説だけに一章をさく必要毛頭ない」（p. 177）などと手厳しい。ただし、Ⅲ章の終わりp. 135には「此の章は大変面白い。これは『基督者の悦びと苦悩』F. Mauriacの延長となる」と書く。『日記』に24日読了とある。

4月25日

「かねてから読みたいと思っていたクロソウスキーの『わが隣人サド』をよみ始める」。

Pierre Klossowski, Sade, mon prochain, Paris, éd. du Seuil, 1947. 1エ/400

▶ 「カトリックの護教家サドという逆説的着眼」で知られる書。遠藤は、全体にくまなく目を通して。いくつも書きこみがある。たとえば、p. 98の「神の神秘と不可解性」という箇所を下線を引きながら、欄外に「Sadeにとっての自然」というテーマで「自然は基督教や古代ギリシャ哲学のやうに、秩序ではなく、混乱、或はカオスそのものであった。Sadeはそのカオスの中に無為にうごめく乱雑な原素、悪の生命力を肯定した」と書いている。また「クロソウスキー氏会見記」（『ロベルトは今夜』の邦訳内所収）のなかで、「この本（注：『わが隣人サド』のこと）は、8年前、ぼくがリヨンに留学していた1951年の冬（注：『日記』とは季節が符合しない）、凍雪の残ったバルクール広場前のフラマリオン書店の書棚でなにげなく手にとった」と書く。さらに、最も注目した点として、「（聖母マリアが）無原罪であったと讃えられる」＝「罪のない状態の投影」とされながら、その一方で「男性を肉欲に誘い、罪にひきこむ罫」＝「エヴァ」とした処女性の分析を『わが

隣人サド』の白眉としている。遠藤は処女を「男を肉欲に引きこむ罫」とする見方をこの書から得たようだ。

なお、同日の『日記』に以下の記載あり。「『黙示録』9章5-6の次の言葉は、世界の内で最も恐ろしい言葉であろう。この日、人は死を求めて、死を見いださず。死なんと欲せど死は、彼等より遠くに去れり」。

4月28日

『日記』に「『フォンスの井戸』を書きつづける」とある。翌日も同じく、「『フォンスの井戸』を書きつづける」と記す。そして、4.29., ナチの暴虐の展覧会に足を運び、「この印象を『フォンスの井戸』にどう生かすか……」と書きつづける。

4月30日

「スタインベックのソビエト紀行をよむ。別に印象はない」とあるが、この本は所在不明。

5月2日

「『ノートルダム通り』をよみ始める。スシイ神父の激賞に拘らず、一向にこの小説はぼくには面白くない」とあるが所在不明。

同日「今日は、計画に基づいてヴァレリー論（サタンの中のと、小説史）をよんだのだがどうもよくわからない」と書く。カッコ内の「サタンの中のと」は「悪魔」を特集した雑誌（1951. 3. 10. 参照）を、『小説史』は《Histoire du roman français depuis 1918 - Tome I》の第10章を指すと思われる。

5月3日

「アンドレ・ルソーの二十世紀文学史、第3巻のフォークナー論やエリオット論を一寸よんだが、大したものではない」と記す。

André Rousseaux, Littérature du vingtième siècle III, Paris, A. Michel, 1949. 1エ/619

▶ Shusaku Endo Lyon 1951と署名。第2章のArt et natureの箇所、下線と書きこみ。たとえば、p. 185には「自然描写における作家の位置」「作家と自然描写」といったメモが余白にある。自然描写にこだわる小説家遠藤周作の明確な意識は、留学の時点ですでに培われていたようだ。なお、5.7.の『日記』にも同書について、言及箇所あり。ブルトンに触れた章に関して、最も稚拙な方式と称して、シュルレアリスムの中に宗教性や神秘への野望をみる評論のあり方を批判。

5月4日

『日記』に「ジョルジュ・ビュランの『マスク』を読み始める。丹念によめば一月はかかるであろう。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

しかし、それに値する充実した論文であるように思われる」と記す。このあと数日、遠藤はこの本に心酔。それだけではない。遠藤は著者ビュランに手紙を書き、返事ももらっている（『日記』5.23.）。

Georges Burand, *Les Masques*, Paris, éd. du Seuil, 1948. 1エ/163

▶ 『日記』によれば、1951. 5. 4. 以降、数日をかけ熟読したとあるが、「滞佛日記」（『日記』をもとに作成したエッセイ）では1951. 3. 22. に『マスク論』を読みはじめる」（『全集12』p. 192）とあり読書時期にはズレがある。原書にこんな書きこみをしている。「社会に於て人はmasqueをかぶる。他人と同じmasqueをかぶる。然し、死は、此のmasqueをはぎ、彼独自の顔にする」（p. 201）。また、p. 15の余白には、数行にわたって関係代名詞が入れ子のようにいくつか重なる文章に下線を引き、余白にこう記している。「此のような表現の使用、折りたゝみ式方法、戦後の評論家の特徴。Sartre, Edmonde Magny, Simone de Beauvoir等に共通する」。こうした文体チェックを含めて、細かく読みこんでいるのがわかる。なお、『日記』に本書から刺激を得ながら、次のような感想を書きこんでいる。「基督教のみがマスクを用いない宗教である。何故ならマスクとは人間の条件をのり超えようとする意志なのだが、基督教はそれ自体において人間の条件を肯定しようとする思想だからだ」（5.7.）。また、遠藤を繰り返し襲う、アフリカ行きの願望（ランボー的あこがれ）に触れながら、文明人がかぶる虚栄のマスクに対して、「ネグロは、それと反対で、隣人のマスクをかぶったりしない、ネグロは、恐怖や、精霊のマスクをかぶるのだ」と『マスク』からの一文を『日記』（5.9.）に引いている。

5月6日

「ヘミングウェイの『武器よ、さらば』の上巻だけ（下巻を日本から送ってこないの）を邦訳（大久保氏訳）でよんだ」とあるが所在不明。

5月11日

「バルヌ・ジョフォリーのヴァレリー論、第一章を読む。今日よんだのはヴァレリーの解説的伝記で、これは余り面白くない」と書く。

André Berne-Joffroy, *Présence de Valéry*, Paris, Plon, 1944. 1エ/391

▶ 原書の1章の終わりに遠藤らしい書きこみが見つかる。差別的な文言だがそのまま引く。「ちょうちん持、太こもち、ギャーギャー言わずに、Valéryを一刀両断で料理してくれ」（p. 104）。

5月15日

フォークナーの『サンクチュアリ』の後半を読み返したが、どうもすばらしい作品だ（前出 1951. 3. 14.：所在不明）。

5月16日

『日記』に「ピエール・ド・ボワデッフルの『文学の変貌——バレスからマルローまで』を今日から

読み始める。今日読んだのは、モーリアック論である」と書かれている。19日までこの本を読み続けている。

Pierre de Boisdeffre, *Métamorphose de la littérature 1-De Barrès à Malraux*, Paris, éd. Alsatia, 1950. 1エ/144

- ▶ 下線部から判断して、A. Gide, F. MauriacならびにA. Malrauxの章を中心に読んでいる。とくに、Mauriacの章には書きこみが多い。著者Boisdeffreが、Magnyの影響を受けながらMauriacを読んでいることに遠藤はいち早く気づいている。あわせて、『日記』に、この批評家に着目した理由を「二十八歳でほくと同じ年齢である事、ほくと彼とが、どの点位まで勝負できるかをみたいからに他ならぬ」(5. 16.) と書いている。

なお、同日の『日記』の最後にはこんな添え書きがある。「ほくだけにしかない人生、ほくだけにしかない芸術—それを完成したら〈この生に生きていた事〉はよし死がほくを亡ぼしても惜しくないのだ」。

5月20日

「『人間の条件』を今日からよみ始める」とあり、『日記』の記述から5. 27. まで読み続けていた。

André Malraux, *La Condition humaine*, Paris, Gallimard, 1946. 1エ/459

- ▶ ボワデッフルの『文学の変貌』に刺激されてはじめた読書 (A. Malrauxの小説で確認できたのは原書で本書のみ。ほかに『征服者』『侮辱の時代』『王道』を読んでいると『日記』には書かれている)。フランス語による書きこみが目立つ。例をあげれば、作中人物Tchenに触れて、Si on confond Tchen avec Malraux, on n'a pas tort de dire "Malraux le fascinateur" comme le dit C. E. Magny. Mais… (TchenとMalrauxとを混淆するなら、C. E. マニーが言ったように「マルロー、魅惑する人」と言うのは間違いではない。しかし…) (p. 52) といったメモ。固有名詞や引用符などから、これまでのフランスでの読書を振り返りながら書きこみと知れる。購入日が1951. avrilと見返しにメモ書きされているので、留学から約10ヶ月、かなりフランス語になじんだ頃。

5月22日

「ドニ・ド・ルージュモン『悪魔の分け前』を、買ったのでそれを今日半分ほどよんだ」と書かれている。

Denis de Rougemont, *La Part du diable*, Paris, Gallimard, 1946. 1エ/618

- ▶ 悪魔に関する本だが、悪魔の持つ仮面的な性格に関心を寄せている。『マスク』を読んだ流れでこの本にも手を伸ばしたことが、書きこみなどからわかる。『日記』(5. 22.) を見ると「悪魔の最も大なる詭計は彼が〈存在しない〉と人に思わせる事」と書き「この本はベルナノスの悪魔観にピタリと一致する」とある。

5月29日

「ジョン・オハラの『サラマの決闘』を今日から読み始める事にする」と『日記』にある。

John O'Hara, Rendez-vous à Samarra, Paris, éd. du Seuil, 1948. 1エ/549

- ▶ 「この本からは小説技術を考えたい」とはっきり目標を定めて読み始めている。後に「アメリカの画一主義の性格についての記述」は、H. マッコイの別の作品と比して劣ると感想を記す（『日記』1952. 3. 1.）。ただ、通読はしておらず、目を通してはいるのは出だしから数10ページと後書きの部分。p. 19にこの作品の描写法に触れた書きこみがある。『アメリカ小説の時代』（Claude-Edmonde Magny）と比較・対照しながらの読書であったようだ。

6月5日

『日記』に「今日からネリー・コルモー夫人の、大きな論文、『F・モーリアックの芸術』をよみ始める事にする」と記す。

Nelly Cormeau, L'Art de François Mauriac, Paris, B. Grasset, 1951. 1エ/239

- ▶ F. Mauriacの研究書として知られた一冊。モーリヤック作品の特色を確認するように「Bordeauxの地名が作中人物につけられている」（p. 16）とか、「作中人物の表情を描くのに一語あれば足りる」（p. 329）という箇所に下線を引き、メモ書きをそえるなど、モーリヤックの小説を読み解くヒントや情報をいくつも得ている。『日記』にはこの作品をポーヴォワールやマルローと比較して読み返したいと記している（1951. 6. 5.）。また、後日、「『モーリアックの表現』は実に参考になった」と書く（『日記』6. 13.）。

6月9日

『『ナシの物語』（W・フォークナー）の仏訳者は、R-N・ランボオ、CH-P・ヴォラ、M・E・コワンドローであるが、コワンドローの訳した「エミリオの薔薇」「黄昏」「くるしき9月」を今日よんだ」と書かれている。

William Faulkner, Treize Histoires, Paris, Gallimard, 1949. 1エ/292

- ▶ 「エミリオの薔薇」と「くるしき9月」はSeptembre ardent（英語：Dry September）所収（ただし、「黄昏」は本書にはない）。同日の『日記』にはこんな感想を添えている。「もし、ほくがこのような小説（リンチ、強姦、発狂といったシーンが「硝子の破片みたいに、ほうり投げられ」た小品Septembre ardentを指している）を書くとしたら、事件はありきたりの場所、人物はありきたりの人物を描くだろう。事件はいかなる平凡な人間の内部にも巣くって居り、それは白昼に行なわれる程、悪夢的である」とある（◆遠藤の初期作品（短編）はむしろこの意味から、フォークナー的と言えるのではないか）。

6月10日

身体の不安を『日記』に書き記す。「夜、昨日から痛む、右胸下部が亦、痛み始めた。死の恐怖が、

白み始めた空を前にして、ぼくを眠らせなかった。少なくとも、小説を書いて、死にたい」。

この先、モーリヤック小説を何冊も続けて読んでいる。8月のポルドー旅行（F. Mauriacの故郷）の伏線となった恰好だ。直接には、ネリー・コルモアの『評論』に刺激されたのだろう。

6月13日

「夜、『テレーズ』を久しぶりで再読しはじめたが、全く、感歎する描写力だ」と手放しの讃辞を記す。

François Mauriac, Thérèse Desqueyroux, Paris, Livre moderne illustré, 1935. 1エ/709

▶ 遠藤は複数の版を持っていたと証言しているが、町田市民文学館に所蔵されているのは、L.-J. Soulasの木版画数葉を添えたもの（この版画は中央公論社の『(世界の文学セレクション36) ジード・モーリアック』に使われている）。Tokio, 1948と裏ページに書きこみがあるので留学前に購入したものとわかる（上総英郎と昭和44年に「三田文学」誌上で行われた対談のなかでこの本に遠藤自ら言及している。渋谷の道玄坂の古書店で購入したと）。7章と9章に記されたle silence d'Argelouse「アルジュルーズの沈黙」の箇所注目して、下線、書きこみを施している。なお、いわゆるテレーズの夜の旅を簡単に図示した地図もどき（写真6）が、p. 30にペン書きされている。後のポルドー旅行記「テレーズの影を追って」につながる書きこみである（◆なお、《Thérèse Desqueyroux》に関する遠藤のこだわりについては、邦訳『テレーズ・デスケールー』（遠藤訳、遠藤所蔵本）をめぐって、本稿の2章で扱っている）。

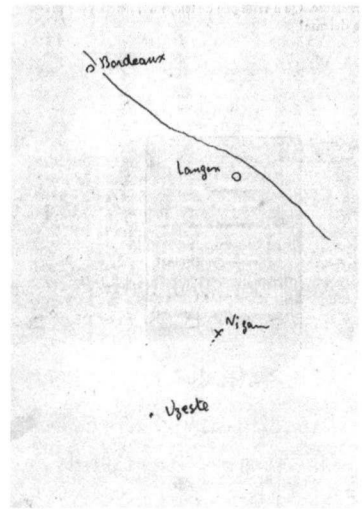


写真6 『テレーズ』の夜の旅

6月20日

『テレーズ・デスケールー』に引き続き、モーリアックの『夜の終り』を読みすすめる。

François Mauriac, La Fin de la nuit, Paris, B. Grasset, 1935. 1エ/502

▶ 作品内の細かな描写に気を配りながら読み進めている。原書の巻末に1951. 6. 22. と読了日が書かれている。同日の『日記』（6. 22.）を繰ると、「孤独感がまたやって来た。黄昏から雨が降りだした」（◆遠藤作品の多くに登場する時間帯、それは「黄昏」の時。人生の「黄昏時」を含めて、遠藤が沈黙考する時でもある）とある。また、『夜の終り』は『テレーズ』に比べて、はるかにおとった小説である。（中略）テレーズに無理にprédestinéを与えようとする所に誤りがある」とも。なお、『夜の終り』は若きサルトルが「作中人物の自由」を奪っている小説としてモーリヤックに噛みついた一冊。

6月26日

「モーリアックの『プロンジェ』をよみ始める」。

Françoia Mauriac, Plongées, Paris, B. Grasset, 1938. 1エ/504

- ▶ Mauriacの短編集。全体を読んでいる。「愛のふるまいほど、不自然でわざとらしいものはない」(p. 38)という箇所を下線。『テレーズ・デスケルー』の続編にあたる「『医師を訪れたテレーズ』」「ホテルでのテレーズ」も載っている。なお、『日記』(7. 1.)に「モーリアックの『クリスマス物語』と、『身分』とを読了」とあるが、後者の最後の結末は不要であると感想を記す。

7月2日

『日記』に「この夏の計画はきまった。ボルドオで、モーリアックの人生を考える事とウイリアム・フォークナーの作品を7月中に研究しはじめる事である」と記した後、「フォークナーの『八月の光』を読み始める」と書く。

William Faulkner, Lumière d'août, Paris, Gallimard, 1948. 1エ/286

- ▶ 単調で、冗長な文体に辟易しながらも、真摯に作品に対して。途中、フォークナーの悪魔性とベルナノスのそれとを比較した書きこみあり(p. 254)。『日記』に「彼(注:フォークナー)は全然世界を整理しようという意志がない。そこに彼の宿命感があるのである」(7. 9.)、「『八月の光』の中で、大事な事は、肉欲の世界の描写と神の残酷性という事だ」(7. 13.)、「W・Fの描写方法は一言で言えば、高速度撮影である」(7. 14.)などと感想を書きつけ7月15日に読了。『八月の光』については、この先、さまざまな著書のなかで繰り返し触れることになるが、わけても後に物されることになる「テレーズの影を追って」(『三田文學』所収)の構成のヒントが、ボルドーへの旅行前に本書を読んだ時点ですでに固まっていた点が興味深い(『日記』7. 17. 参照)。

7月19日

「D・H・ロレンスの『アメリカ古典文学論』をよみ始む。『アメリカ古典文学論』の中から、ほくが、探ろうとするのは、アメリカ文学の中にひそんでいる宿命感、生の無秩序感である」とある。

David Herbert Lawrence, Etudes sur la littérature classique américaine, Paris, éd. du Seuil, 1948. 1エ/421

- ▶ Shusaku Endo 1951. Juillet Lyonと記名。原典のp. 14に欧州との血縁から逃がられないアメリカ人の宿命についての記述があり、その余白に、「Américainsのl'Europeに対する反逆と然しそこから逃れられなくなるくるしみ」と書く。序文とポー、ホーソンならびにメルヴィルについて触れられた箇所を中心に読んでいる。例をあげれば、Il y a quelque chose de véritablement écrasant dans ces chasses à la baleine, de presque surhumain ou d'inhumain, de plus grand que nature, de plus terrifiant que toute activité humaine. (p. 194)の指摘を「白鯨の悪魔性」と余白に記す。そのほかの本書への分析は『日記』(7. 26.)に詳しい。なお、「アメリカ的血液のなかにほの暗い破壊本能がひそんでいる事、愛するものを殺し、破壊させずにはいられない暗い衝動のあることをみ

ごとに説明しています」(『全集12』p. 50) など本書を分析した文章はほかにもある。強い刺激を受けた一冊である。

8月

『日記』には月初めにわざわざ、(モーリアック研究日記)の文字が記されている。この月、『テレーズ・デスケルー』の舞台となったランド地方を旅する。また、ボルドー近郊のカルメル会修道院で修業中であった井上洋治(遠藤と同じく船艙で寝起きする「四等客船」の船客であった)を訪ねる。

8月2日

『日記』に「汽車の中で今度のボルドオ旅行(注:ランド地方を徒歩で旅してもいる。ちなみに『日記』(8. 13.)に「全く大変難渋な一人旅であった」と感想をつづる)について考えた。この二月前から心に成熟した『テレーズを追って』(注:実際には『テレーズの影を追って—武田泰淳氏に』というタイトルとなる)という作品の骨子は、宿命というものについての考察である」と書く。同日、モーリアックの故郷へ。「一時半汽車でボルドオに向かう。宿命という事。サルトル的に言えば、宿命を内面文学として捉えた人間は無意識にそれを彼の中の社会的人間にもだしている筈である。内面文学に捉えられたものは知らずに外面的なものへの姿勢となっている。それをつきたい。その原因を探りたい」と付記。翌日、François Mauriacの著作をBordeauxにてまとめて購入。「『黒い天使』『愛の砂漠』『地上の火』『火の河』をかう」(8. 3.)とある。

8月5日

『日記』に「午前中、『地上の火』をよみ上げる」とある。

François Mauriac, *Le Feu sur la terre*, Paris, B. Grasset, 1951. 1エ/508

- ▶ 最終ページに「1951. Août. Bordeauxにて読了」とある。ただし「さほどこれは感銘しなかった」と『日記』には追記あり。

「午後、『愛の砂漠』を読みつづける」(おそらく前日より)とある。

François Mauriac, *Le Désert de l'amour*, Paris, B. Grasset, 1925. 1エ/497

- ▶ F.Mauriacの「愛欲論」とのからみで重要な作品と位置づける。この時期、「愛欲」は遠藤のキーワード(というより、留学中、一貫してこのテーマが遠藤の頭の一部を確実に捉えている)。ボルドー旅行の際に購入した書籍のなかの一冊。主人公マリアの運命をMauriacの代表作Thérèse Desqueyrouxと関連づけながら読みすすめていたとおぼしき書きこみがいくつかある。

8月7日

「今、『ある人生の始まり』の各所をノートしながら、ミシュランの地図をみる」とある。

François Mauriac, *Commencements d'une vie*, Paris, B. Grasset, 1932. 1エ/501

- ▶ 全体に目を通していているようだが、特筆すべき書きこみはない。『日記』にあるように別途ノートを作成しながらの読書であったようだ。

同日、さらに「エマヌエル・ベルルの『ブルジョアと愛』をよみ始める。夜、『黒い天使』を続読」と記載あり。

Emmanuel Berl, *Le Bourgeois et l'amour*, Paris, Gallimard, 1931. 1エ/124

- ▶ *l'amour*(愛)や*érotisme*(エロチシズム)が社会や階層とどのような関係にあるかというテーマに則して、複数の書きこみがある。「Bourgeoisの*l'amour*に対する憎悪」(p. 13)「*érotisme*の問題は社会につながる」(p. 245)といった書きこみが見える。この本の結論を「今日のブルジョワ階級の悲しみは、男性も女性も愛慾の中に生の意義をみとめる事が出来ないという事だ」(『全集12』p. 169)と紹介しているが、『日記』(8. 8.)では「期待していた程、面白くない」と記し、短絡的な結論に不満をのぞかせる。

François Mauriac, *Les Anges noirs*, Paris, B. Grasset, 1936. 1エ/503

- ▶ 最終ページに「1951. Août. Bordeauxにて再読了」とある。購入日が1951. 8. とあるので、日本で最初に読んだ本とこの本は別もの。余白に作品の舞台を地図にしている箇所あり。遠藤の文学論である「カトリック作家の問題」のなかで、宗教をもった作家のさりげない描写を日本人が見落としやすい例としていの一にあげられているのがこの作品(『全集12』p. 18)。いわく、「ほく等、日本の青年が(中略)『黒い天使』を読む時と、仏蘭西の青年がそれを読む時との感覚には相当の隔たりがあるらしいのです」。なお、この先、「カトリック作家の問題」は、「作家の秘密は、往々にして、その自然描写に発見される」とする持論へと展開する。『日記』(8. 10.)で『黒い天使』の簡単な分析をしている。あわせて、F. Mauriacの作法がフランスの伝統を具現していると看破、「モーリアックの構成が古典派の三一致法則(注:時・所・筋の3つに限定をかける劇作上での制約。「三一致の法則」あるいは「三単一の法則」と通称される)を受けついでいる事がよくわかる」と記す。

8月17日

「メルロ＝ポンティの『ヒューマニズムとテロル』を読み始める。今日、よみ始めたのは「プロレタリアから人民委員へ」であるが、非常に難解である」と『日記』に書く。

Maurice Merleau-Ponty, *Humanisme et terreur*, Paris, Gallimard, 1947. 1エ/517

- ▶ 「marxismeの目的と手段とは？」という問いを前提に細かく目を通している。当時のフランス人学生とともに遠藤がまきこまれていた政治の季節がいかなる性質のものであったかを感じとれる書

きこみが多い。なお『日記』を見ると、この先、9月の雑誌のムーニエ特集号の読書を皮切りに（ちなみに、ムーニエが作ったキリスト教左派のグループに遠藤は参加していた時期がある。ただ、その会合の席では「自分が遠い一人の異国人だという気持ちにとらえられた（『全集12』p. 410）」らしい）、1951年11月、12月にかけて、それまで以上に詳細な読書の感想を書きつけ、同時に政治に触れた記述の量が増えてゆく。その伏線となった作品のひとつと言えそうだ。

9月 サンフランシスコ平和条約，日米安全保障条約調印

9月3日

「夜、ゲラン（ユウジェニ）の日記を少しよむ」とあるが所在不明。

9月8日

「ユウジェニ・ゲランの伝記」とだけ『日記』にメモ書き。おそらく前出（1951. 3. 31）を指していると思われる。

10月5日

『日記』に「ジッドの『今や彼女は汝のうちにあり』をよむ」とある。

André Gide, *Et Nunc Manet in te suivi de Journal intime*, Paris, Ides et Calendes, 1947. 1エ/323

▶ 全体を読みこんでいる。『日記』に「これは、ジッドと妻マドレーヌとの夫婦の悲劇である」とある。遠藤は作家ジッドの信仰心には厳しい判断をくだしていた。

10月12日

「マルク・ベークベデルの『エスプリ誌への手紙』を読み始む」とある。

Marc Beigbeder, *Lettre à "Esprit" sur l'esprit de corps et la contrainte par corps*, Paris, Gallimard, 1951. 1エ/118

▶ Mounierの創刊した雑誌Esprit(カトリシズムと社会主義の結合のもと、社会のための個人、個人のための社会を目指す)への共感と幾ばくかの疑義とが混ざった下線、書きこみが見つかる。「現実を前にしての善意の空しさ—これがエスプリ派の悲劇である」と同日の『日記』に記す。あわせて、『日記』(10. 13.)にも細かな言及あり。

10月15日

『日記』には「エマニュエル・ムーニエの『人格主義とは何か』を読み始む」と記されている。

Emmanuel Mounier, *Qu'est-ce que le personnalisme?*, Paris, éd. du Seuil, 1946. 1エ/533

▶ ムーニエの唱える「人格主義」の意味を探るべく、真剣にこの本と格闘している。タイトルの書かれたページにおびただしい書きこみ(写真7)。また、1章の終わりの余白(p. 22)に、次のふ

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

たつ。

- ① pureté du conservateurとpureté du personalisteの違い
- ② ペルソナリストはefficacitéを考慮する

2章の終わりの余白 (p. 33) には以下のコメント。

p… (注: ペルソナリズムのこと) は一つのaction raisonnableでも又pureté conservateur^(ママ)でもない。それは現実の中にefficacitéを考へる事である。

personnalismeをmarxismeや資本主義社会といったキー概念に照らして読みこむとともに、「個人の抑圧」「個人と集団との関連」といった観点からいくつかの書きこみをしている (◆ちなみに、人格主義は実存主義とマルキシズムとの二元対立の統合を目指したもので、この二元対立を前提とした発想法は遠藤のそれにつながっている)。『日記』にも細かな人格主義分析が見つかる (10. 16.)。

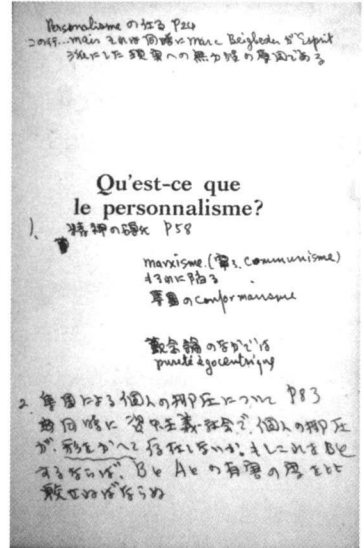


写真7 『人格主義とは何か』

10月17日

『日記』に「ムーニエを読了, 続いてジャン・ラクロワ教授の『マルクス主義, 実存主義, 人格主義』を読み始める」とある。

Jean Lacroix, *Marxisme, existentialisme, personnalisme*, Paris, Presses Universitaires de France, 1951. 1エ/412

- ▶ marxismeへの疑問やmarxismeにおける課題などを思いつくまま、いくつも余白に書き記す。『日記』(10. 23.)には「ラクロワの本のマルクス主義の部と信仰の部読了」とある。なお蛇足だが、この本のカバー(遠藤作)の裏にはフランスでの生活費をメモした跡があり、「煙草65/レインコート3500/アペリチーフ150」などの文字と価格(単位はフランで表記)が見える。

10月23日

「グレアム・グリーン『事件の核心』をよみ始む。今日は第一章を全部読んだ」と書かれている。Graham Greene, *Le Fond du problème*, Paris, R. Laffont, 1949. 1エ/354

- ▶ 最後の「彼は間違いなく愛してはいなかった」と書かれた箇所「？」を記している。『日記』(10. 24.)に「『事件の核心』の第一部を流れるものは〈空虚〉の感情である。この空虚をグリーンは、アフリカの砂漠に投影してみせてくれる」と書く(◆遠藤の『アデンまで』の砂漠にラクダが登場するシーンを支配する空気と重なる)。なお、『日記』(10. 26.)に、この小説の最後の部分(スコビーの自殺)がわからないと嘆息を漏らす。

10月25日

「再び、リヨンの暗い、重くらしい冬がやって来た」と書く。遠藤の初期作品を包む重たい雰囲気
にそのままつながる孤独な季節の到来。

10月30日

『日記』に「非常に寂しい日、何故か知らぬが全く孤りということをつくづく感じる日」と書いた後、
「エマニュエル・ムーニエ『キリスト教徒の挑戦』を読み始める」と記す。

Emmanuel Mounier, L'Affrontement chrétien, Paris, éd. du Seuil, 1951. 1エ/537

- ▶ Shusaku Endo 1951 Octobre Lyonと署名。見返しに「近代的基督者のつまづき」「Mounierによる
chairの意義 p. 44」「Christianismeが現在の保守的老衰に至った経路」「Bourgeoisieとchristianisme
の結びつき」など書きこみ。その書きこみを受ける形で、p. 69にさらなる書きこみ。なお、この
一冊は遠藤に「外部へ目を向ける」ことの意義を再考させる契機となった書物として意味がある。
1951. 1. 25. の『日記』に記された外部への無関心から心は変わりつつある。

11月 「カトリック・ダイジェスト」に「赤ゲットの佛蘭西旅行」の連載がはじまる（翌年7
月まで）。

11月1日

『日記』に「グレアム・グリーン『権力と栄光』を読み始める」とある。

Graham Greene, La Puissance et la gloire, Paris, le Club français du livre, 1948. 1エ/352

- ▶ 第3章の後半に下線、書きこみが集中している。とくに、著者独特の記述法に関心をむけ、たと
えば、神父の死を直に描かずに、会話のやり取りのなかでさりげなく暗示し、くだくだした説明を
はぶいた箇所に下線を施し、「処刑を直接に描かぬ手法」(p. 342)といった書きこみをしている。
グリーンに特徴的な映画的手法が盛られた作品。ちなみに、この作品は国家権力の宗教弾圧下での
司祭と信者の生き方を描いている点で『沈黙』と共通する(11. 7. の『日記』には「構成と技法の
上で、この本は非常にためになった」とある)。ただし、『沈黙』のロドリゴは転ぶが、『権力と栄光』
のウィスキー司祭は殉教する。なお、ジョン・フォードの映画「神は死なず」の原作で、1950年に
遠藤はこの映画を観ている。

11月8日

「ムーニエの『二十世紀の小さな恐怖』をよみ始む」と記す。

Emmanuel Mounier, La Petite peur du XX^e siècle, Paris, éd. du Seuil, 1948. 1エ/532

- ▶ 書きこみは多数。なかでも「告発された機械」という論考に着目している。「機械の人間化」によっ
て「人間の機械化」「物化」を防ごうという内容だが、その展開に疑問を投げかける。

11月12日

『日記』にダニエル・ラガッシュの『愛欲嫉妬』を読んだとある。「今日よんだのは、第一巻の中にある〈アンヌの場合〉という一章である」とあり「嫉妬」をめぐる分析を箇条書きしている。

Daniel Lagache, *La Jalousie amoureuse*, Paris, Presses Universitaires de France, 1947. 1エ/413

▶ Shusaku Endo 1951, *Novembre* Lyonと記名。本書は大学出版局刊行の研究報告書で、9章と10章に集中的に読書の痕跡あり。余白には「嫉妬」*jalousie*をキーワードに複数の書きこみがある。たとえば、p. 340の余白にはHommes 58%, Femmes 42%の記述を受けて「*jalousie* 男性の方が女性より強い」とか、「女性の場合50~54にかけてのj(注：*jalousie*のこと)の*recrudescence*(注：再燃)は月経閉止による。(?) Pourquoi?」(p. 342の余白)と書く。

11月13日

「ポンティの『ヒューマニズムと恐怖』の再読。今夏よまなかった部分の内、今日、序文を読みさす」とある(『日記』1951. 8. 7. 参照)。

11月16日

『日記』には「ポンティの『ブハーリン裁判の曖昧性』をよみ始める」とあるがこの本は所在不明。

11月19日

「アーサー・ケスラーの『零と無限』を読み始める」とある。これは、遠藤がはじめてパリの地を訪れた1950. 7. 8. にも手に取っている本。再読。

11月20日

『日記』に読書に関しては「『零と無限』続読」とあるだけなのだが、この日、不意に自身の「長く思える」二十代を振りかえり、20歳から27歳までの履歴を簡単に書き記している。ちなみに、フランス留学した27歳は「6月、フランス出発。原民喜自殺する」の2行のみ。

11月26日

「グレーム・グリーン『密使』を読み始む」と書く。

Graham Greene, *L'Agent secret*, Paris, éd. du Seuil, 1948. 1エ/353

▶ 一カ所書きこみ。「何故、Dにして、固有名詞を書かないのか?」と主人公を略語で表記することへ不満をのぞかせる。『日記』にも「主人公のイニシャルは、さほど効果ない」(11. 26.)と書く。以下、研究者・中野記偉の指摘。「『白い人』は、グリーン『密使』と、堀田善衛(遠藤にフォークナーやジュリアン・グリーンの名を教えた人物『昔のころ』(S. 33))の『歯車』と共通性を持つ。また、兎口の劣等感にさいなまれた『拳銃売ります』の主人公は、斜視の神父が兎口の劣等感から殺人を働く男が出演する映画を見たことを思い出す『白い人』のシーンに重なる。あわせて、『拳

銃売ります』の老首相が殺し屋レイヴンに向かって叫ぶ「撃つがよい。撃つがよい」という言葉の繰返しは『沈黙』の「踏むがよい」をおのずと連想させる」。ふと、本書の書きこみを見ていて思い出した。遠藤が戯曲『黄金の国』の端役を「百姓A, 百姓B」(実際の台本を見るとキャストの一覧に役人一, 二とか百姓一, 二とある)と名なしのゴンベエで片づけたために、演出の芥川から「君は役者への愛情がないんだ」と叱られた一件を(「芥川比呂志氏を思う」『全集13』pp. 332-333)。

12月3日

『日記』にはじめて「血たんが出る」と明記。

12月4日

『日記』に、グレアム・グリーンの小説技法、作法についての簡単な感想を書きつけた後、「午後、ソ連の中央委員会出版の『共産党の歴史』を読む」とあるが、本書は所在不明。

12月5日

サルトルの『汚れた手』について、「この戯曲は、ぼくにはわからない。もう一度、丹念によみかえしてみたい」(『日記』1950. 9. 28.)とあったが、この日、「『汚れた手』を再読しはじめる」とある。翌日(12. 6.)の『日記』で本書についての自分なりの解釈を書きとめている。

12月7日

「グレアム・グリーン『内なる私』を読み始む。最初のアンドリュースが森の中を恐怖においつめられて逃げる書き出しは非常にうまいと思った」と記し、翌日「グリーン『内なる私』を非常な感動を持ってはくは今、読了した所である」と書く。

Graham Greene, *L'Homme et lui-même*, Paris, Plon, 1950. 1エ/355

▶ 下線多し。見返しに読後感をメモしたとおぼしき「Green^(ママ)のrédemption(贖罪)の意義。罪人の感覚。無力の感覚」の文字あり。この書のラストの8~9行分にもまとめて下線を引いている。

12月23日

『日記』に弱音。「血痰はつづく。あと十年だけでも生きたい。このまま死にたくないのは、まだ、この地上がこの世界がどういふものかわからないからだ」。翌日のクリスマスの日も「血痰つづく」と書いた後に「広い寒々としたこの寮の中で、一人になってしまった。病気、孤独、たったそんな事にも耐えられぬ程、卑怯な弱い男なのか……」と自問。

12月26日

あいかわらず、血痰が続き、死の恐怖にとらえられながら、「クロード・モーリアックの『ジッドとの対話』をよみ始める」。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

Claude Mauriac, Conversations avec André Gide, Paris, A. Michel, 1951. 1エ/324

- ▶ Shusku Endo 1951 décembreと記名。読書の痕跡が確認できるのはMalagarと題された章。『日記』(12. 27.)には「パリ」の章も面白いと書かれているが下線や書きこみはない。p. 107 Dimanche, 25 juin 1939, p. 110 Lundi, 26 juin 1939に文中の固有名詞, Faux MonnayeursとBarrèsと書きつける。p. 131 je ne crois pas ; je sais qu'il n'y a aucune raison de croireの箇所の下線。数行にわたって、横線。p. 146 - C'est la découverte ... la plus vraisemblable.に横線。

12月30日

「ヴィクトール・セルジュの『トロツキー』を読みだす」とある。

Victor Serge, Vie et mort de Trotsky, Paris, Amiot-Dumont, 1951. 1エ/652

- ▶ 1951年のクリスマスに購入した書籍。4章, 5章を読みこんだ跡がある。TrotskyやLenineの考えが大衆にどう受け入れられ, スターリン主義, 官僚政治といかに対峙し, いかなる形でソ連邦の革命を支えたか, 書きこみから遠藤の関心はその点にあったと判断できる。

1952年(昭和27年)

正月は体調を崩す。ただし、検査結果が判然としないまま不安な時間を過ごす。

1月7日

J・P・サルトル『実存主義はヒューマニズムなり』の名が『日記』にある。

Jean-Paul Sartre, L'Existentialisme est un humanisme, Paris, Nagel, 1951. 1エ/641

- ▶ Shusaku Endo 1952 Janvier Lyonと記名。書きこみ多数あり。複数の筆記具で書きこみ。何度か繰りかえして読んだ本だと思われる。たとえば, こんな書きこみが見つかる。p. 104 (Philosophie et politique Marxistes (マルクス派の哲学と政治))と小見出しのある箇所に記された, Quelle que soit la morale que vous aurez, on ne sent pas un lien logique aussi étroit entre cette morale et votre philosophie, qu'entre la Manifeste Communiste et la philosophie de Marx. 「あなたがどのような道徳観(モラル)を持っておいでも, その道徳とあなたの哲学との間には, 『共産党宣言』とマルクス哲学の間にあるほどの緊密なつながりが感じとれない」という問いかけに対して, 遠藤は自分なりの返答を余白に書き付ける。「その理由 (1) Sartreはその哲学でMarxのやうにlibertéに第一義を置いてゐるか。Dépassementは第二にthèseではないか。(2) SartreのlibertéはMarxのそれ程, 具体性を持ってゐない」。サルトルとの「討議」の一員であるかのように, サルトルのismeを分析しているのだ。

1月13日

「『文学の変貌』ボワデッフルの中のサルトル論を読む」とあるが「第1巻に比べて, 余り, 面白く

ない」と付記。

Pierre de Boisdeffre, *Métamorphose de la littérature 2-De Proust à Sartre*, Paris, éd. Alsatia, 1951. 1エ/143

- ▶ Jean-Paul SartreとAlbert Camusの章に読書の痕跡が認められる。『日記』に著者への不満を記す。「ボワデッフルの忘れていた事は、サルトルの有効性に対する考えだ。これはサルトルの共産主義より大切な事である事を彼はみのがしている」。

1月14日

『日記』に「シモーヌ・ド・ボーヴォワールのサド読了」とあるが町田市民文学館の所蔵本（遠藤周作の旧蔵書）には該当する書物が見当たらない。

1月16日

「森有正氏より手紙」とある。同日。「A・カミュの『反抗的人間』を読み始む」とある。『日記』には1.22.に読了と記している。

Albert Camus, *L'Homme révolté*, Paris, Gallimard, 1951. 1エ/178

- ▶ révolution(革命)と神、ニヒリズムなどの観点から読書をしている。La révolte historique, Révolte et Artふたつの章を中心に読んでいる。上記のボワデッフルの章からの刺激と、森有正の言葉が奇縁となって読み始めた一冊であるようだ。

1月28日

「J・マドールのグレアム・グリーン論をよみながら〈カトリック小説と探偵小説〉との関係を非常に面白く思った」とある。

Jacques Madaule, *Graham Greene*, Paris, éd. du Temps Présent, 1949. 1エ/450

- ▶ G. グリーンと「女性」「肉欲」「宗教」といった観点から本文を細かに読んでいる。ただ、最終の数ページはアンカットのまま、読書の形跡はない。さりながら、『日記』(1.28.)に細かな読後感が記されているように、遠藤のグレアム・グリーン観を培った一冊であることは間違いない。とりわけ「神の沈黙」をめぐるJ. マドールのグリーンに対する指摘は、そのまま遠藤周作の文学に直結。いわく「グリーンほど巧みに神の沈黙を描いた作家はほかにない。この神の沈黙こそ、すべての人類のために身を捧げたキリストさえ苦しめたものであるからだ」。もちろん、神の沈黙は遠藤を悩ませ、それゆえに小説家になったとも言える生涯のテーマである。

2月1日

「カミュの『戒厳令』を読み終る。非常にむつかしい。続いて、こういう機会だと思ったので、『正義の人々』(前出:『日記』1950.10.17.参照)を再読し始める」と記す。

Albert Camus, *L'Etat de siège*, Paris, Gallimard, 1948. 1エ/176

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

- ▶ 後半の台詞には何か所か下線とともに「？」のマークが記されている。遠藤が話の展開に違和感を覚えている様子がうかがえる。

2月2日

「『正義の人々』を読了」と記した後、「帰宅後、カミュの『結婚』読み始める」とある。この時期、つづけてカミュの小説を読んでいる。

Albert Camus, *Noces*, Paris, E. Charlot, 1939. 1エ/172

- ▶ 短編2篇、*Noces à Tipasa*, *Le Vent à Djemila*に目を通して。扉裏の余白 (p. 10) に「 Grec的な美を通じて、人間の影像をCamusは描いた」とある。この書きこみの頭には「課題」と書かれている。『日記』には『結婚』を読みはじめた理由を「〈自然はカミュにとって、理想的人間の姿であった〉とし、それを分析したいのである」(2. 2.) と書き、「自然描写」のなんたるか考えることを念頭におきながら読みすすめていることがわかる。

2月3日

『結婚』の一編を読了後、「午後からダッシュル・ハメットの『見つからないもの』を読んだ」とある。この後、推理小説を読む機会が増える。その理由を「少くとも〈伏線〉の方法を学ぶため」(2. 17.) としている。

Dashiell Hammett, *L'Introuvable*, Paris, Gallimard, 1950. 1エ/370

- ▶ たとえばBruno Fischerの《Un sang d'encre》などと同じsérie noireシリーズの一冊。見返しにPaul ENDOとサインをする。ただし、購入年、購入場所の記載はない。下線も引かれていない。書きこみもない。

2月11日

「ダッシュル・ハメットの『ガラスの鍵』を読了」とある。なお、この日の『日記』の最後に「明日からは読書感想は別のノートにとり、この日記は、日常的なもの、外部的なものを書く事にした」とある。

Dashiell Hammett, *La Clé de verre*, Paris, Gallimard, 1949. 1エ/368

- ▶ 描写のあり方に関心し、犯人探しをしながら読書を楽しんでいる。たとえば、p. 110の「脱走の方法」に下線が引かれ、p. 202の余白には「犯人はNed或はMiss Henryか」とある。ただ、ハメットの記述法は「最も疑惑のある人物が実はnon-existence (実在していない存在) であつたといふ事にある。introuvable (『影なき男』) の方法」であるとし、これは「推理小説として欠点があるのではないか？」(p. 206) と疑問を投じている。

2月12日

「サルトル『シチュアシオンⅢ』『唯物論と革命』を読み始める」とあり、翌々日には「サルトル『唯

物論と革命』の第2章「革命と哲学」を読了」と書く。サルトルとカミュの比較、分析が『日記』に記されている。

Jean-Paul Sartre, Situations 3, Paris, Gallimard, 1949.

1エ/639

- ▶ 署名は、Paul Endo 1952 janvier Lyonとある。2つの論考、Individualisme et conformisme aux Etats-Unis「アメリカの個人主義と画一主義」とMatérialisme et révolution「唯物論と革命」に目を通し、多数の書きこみをしている。たとえば、p. 226余白にはCommunisme…ではじまるこんな書きこみがある（写真8参照）。

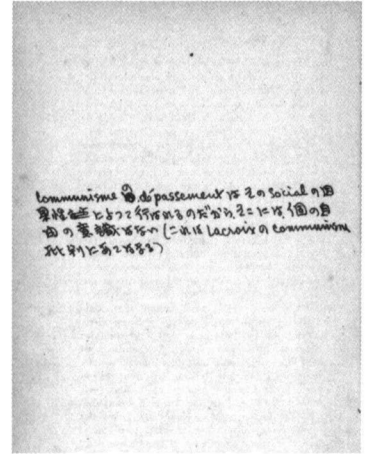


写真8 『シチュアシオンⅢ』

2月16日

「ハメットの『マルタの鷹』を読み始める」とある。

Dashiell Hammett, Le Faucon de Malte, Paris, Gallimard, 1950. 1エ/369

- ▶ 「夜、寝床でハメット『マルタの鷹』を読了。何も学ぶべきものがない」とにべもない感想を『日記』（2. 17.）に記す。ざっと目を通した感じではあるが、とくに収穫なしという印象を原書からも感じる。

2月18日

「サルトルの『悪魔と神』を読み始む」と記す。

Jean-Paul Sartre, Le Diable et le bon dieu, Paris, Gallimard, 1951. 1エ/640

- ▶ Shusaku Endo février 1952 Lyonと署名。第1幕（第1場）ハインリッヒが「教会がまず第一だ」D'Eglise d'abord (p. 33) と強く叫ぶシーンに「L'EgliseとPartiの関係」と書きこみ。第3場（第6景）のゲッツの「おまえは間違っている。お前は、この俺に善は不可能だと教えてくれた。だから、俺は善をすると賭ける」（p. 119）とはじまるセリフの下に、「GoetzとSisyphéとの比較」と書きこみ。また、第2幕（第7場・第1景）で、ある農民が「お前は悲惨な暮らしばかりが好きなのさ。ゲッツは建て直しをしようというのさ！」というセリフに「あんたたちのゲッツはペテン師だ」と叫ぶ場面の脇に、「基督者がくるしまないと如何にして云へる！」と強い調子で書きこんでいる。『日記』では『悪魔と神』に対して、「全く分析困難」（12. 19.）としているが、実際には原書と格闘した跡がいくつも見つかる。主として後半部に下線と書きこみが多い。具体的には「聖者 人間から éloignéされる事によって自分を失ふ。何故なら人間は〈他者の判断〉によって自己を既^(ママ)定するから」（p. 258）（10章/シーン3のGoetzの後ろから3つ目の台詞「ヒルダ、さばかれる必要が有る」以下）とある。

2月21日

「グレアム・グリーンの新小説『情事の終り』を読み始める」とある。

Graham Greene, *La Fin d'une liaison*, Paris, R. Laffont, 1952. 1エ/357

- ▶ 「馬鹿！ 全く面白くねえ小説だ！」(p. 180)と書きこみ。『日記』でもマイナス評価のコメントを書きつけている(12. 23)。ただ小品「小説家の海外旅行」のなかではこの作品を賞賛する(『全集13』p. 317)など、グリーン著作のなかでもたびたび話題にしている一冊ではある。つまり、『情事の終り』はキリスト教作家が作中人物をいかに導くか、作中人物の自由と宗教観のからんだ難題へのひとつの解答ではあるからだ。

3月1日

「コレース・マッコイの『きょうかたびらにはポケットがない』を読了」とある。

Horace MacCoy, *Un linceul n'a pas de poches*, Paris, Gallimard, 1949. 1エ/447

- ▶ 見返しに「電話での会話」に着目したメモ書きがあるが、かなり稚拙でいびつな文字、遠藤の通常の筆跡とは異なる。元の所有者の書きこみという可能性もあろう。ただ『日記』(3. 1.)に「アメリカの画一主義の性格はオハラ『サハラの決闘』よりマッコイの方がうまく書いている」として、この本を探偵小説の叢書に入れていることへの不満を書きつけていることから、丁寧に目を通しては間違いはない。

3月3日

久々に探偵小説を離れ、「G・ルカーチの『実存主義かマルクス主義か』を読み始める」とある。

György Lukács, *Existentialisme ou Marxisme?*, Paris, Nagel, 1948. 1エ/445

- ▶ 現象学の性格をまとめた箇所に記載された哲学的な視点でのメモ(p. 79, p. 94)と、communisteに関する政治・歴史的な観点からの書きこみとが認められる。『日記』には不満も書き記す。いわく、「ルカーチが攻撃するのは実存主義の虚無のミストであるがこれはまことに公式的な批評でつまらなかった」。

3月4日

「ダストールの『テロル世界への序説』をよみ始める」とある。この本には、注目すべき書きこみのある。

Bertrand D'Astorg, *Introduction au monde de la terreur*, Paris, éd. du Seuil, 1945. 1エ/247

- ▶ 革命期のSadeの行動(現実)と小説(フィクション)との対比、Saint-JustとSadeの比較など、章ごとに読みの目標を定めて読書をしている。『日記』には「サン＝ジェストからサドに至る考察をノートにとった」とある。本書p. 102には注目すべき書きこみあり(写真9参照)。なお、最終ページ(p. 122)に「M. Proustの死せるホテルにて読了する」(Paris, 1959, Dec)とあるので、最初に本書を手にとってから7年以上の歳月を経て、『白い人』と本書との共通点にいまさらのように気

づいたことになる。同時に、最終ページの書きこみから、1959. 12., 遠藤はRue Hamlin 44 (エトワール広場とトロカデロに挟まれたアムラン街44番地。ただし、プルーストが亡くなったときは家具付きのアパルトマンであった) の安宿に滞在していたと知れる。

I N T R O D U C T I O N

voir que les seuls murs encore debout de leur patrie sont parmi les ruines ceux qui ne peuvent tomber parce que l'éruption les a déjà cimentés de lave et de cendre...

この本「彼方」の序文は、1959年12月に書いた遠藤が「彼方」の主題の一つに「アムラン街44番地」がある。

3月12日

「ユイスマンスの『彼方』を読み始める」と『日記』に書かれている。

Joris-Karl Huysmans, Là-Bas, Paris, Plon, 1933. 1エ/384

- ▶ 8章, 14章に書きこみと下線あり。『日記』には「この本を読んでいる内に逆にこれと同じ主題を〈小説〉で書こうとするほくの欲求は消え」(3. 13.) とある。その理由は定かではないが、下線から判断するに、「黒ミサ」に関するユイスマンスの描写が秘密の一端を握っていると感ぜられる。遠藤が滞在していたリヨン(永井荷風も滞在した街)は因習的な都市である。当時、街では中世を想わせるような黒ミサ(悪魔に魂を売り渡す代りに、現世の快楽を得るための儀式)が密に行なわれていた。なお、本書を2日で読了。この厚みと内容を誇る作品を本当に2日で読み終えたとしたら、遠藤の読書〈力〉は半端ではない。

写真9 『テロル世界への序説』

3月21日

ふたたび、推理小説。「ブルノ・フィッシュヤの『サ・ト・ラ・クープ』を読了」とある。

Bruno Fischer, Ça te la coupe !, Paris, Gallimard, 1950. 1エ/295

- ▶ 推理小説からは、一般の小説とは違った多彩な描写法のあり様を学びとろうとしていた遠藤だが、とりわけ本書に対してその意志が強いように見受ける。描写に触れたメモ書きをいくつも記している。最終ページには「この最後のしめくゝりは大変よし」と賛辞を書きこんでいる。『日記』にも同じ感想が記されている。

3月24日

前々日に目を通した雑誌「エスプリ」(3月号)のロラン・バルトの『ジャン・ケロールとその小説』に啓発された形で「ジャン・ケロールの『私は他者への愛を生きるだろう』を読み始める」。

Jean Cayrol, Je vivrai l'amour des autres, Paris, éd. du Seuil, 1947. 1エ/186

- ▶ 全ページ、きれいにカットしているが、特筆すべき書きこみなどはない。

3月25日

「午後、フロイトの『夢とその解釈』を読みさす」とある。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

Sigmund Freud, *Le Rêve et son interprétation*, Paris, Gallimard, 1932. 1エ/305

- ▶ 丁寧に読みこんでいる。「夢の種類」を細かにチェックしたり、夢がどのような意識・意志を反映したものかについて関心を寄せている。「幼年時代, *désir refoulé* (抑圧された欲望) は非常に単純な形であらはれる」(p. 133) といったメモ書きがいくつかある。『日記』(3. 26.)には「かねがね探していた〈階段〉は夢の中では如何に理解されるかに悦びをもって発見する」と記す。もちろん、ジュリアン・グリーンとの関連である(『日記』1950. 9. 5. 参照)。

3月27日

「今日は、ぼくの誕生日だ。空が真青に晴れ上がっている」と嬉しそうに書いている。

3月31日

「今日『イヌを笑うか』を読んで色々教えられる所があった」と書いているが、所在不明。

4月 アルプス山脈の麓で春休みを過ごす。リヨンに戻り、吐血。

4月1日

「ジャン・ゲーノは『革命の日記』の中でモスコー裁判について取り扱っている」とある。ちなみにこの裁判は、ソ連政府がスターリン時代にモスクワで行なった半革命分子に対する「公開裁判」のことで、見世物裁判として当初から疑問の声があがっていた。

Jean Guéhenno, *Journal d'une "Révolution": 1937-1938*, Paris, B. Grasset, 1939. 1エ/359

- ▶ 後半に下線を集中して引いているものの、注目すべき書きこみはない。『日記』には、メルロ・ポンティと比較してゲーノの論文は「何と惨めなものであるか」とある。たとえば「(モスコー裁判について) ポンティが敢えて直視したように共産主義者自体の根源的性格からみずに『それはソビエトの事件、ソビエトだけの問題』とする」といった、フランス共産党擁護の内向きな論の展開が遠藤には不満のようだ。

4月4日

「ジャン・アヌイの『芝居げいこ』を読了」とある。

Jean Anouilh, *La Répétition ou l'amour puni*, Paris-Genève, éd. La Palatine, 1950. 1エ/76

- ▶ 翌日、4. 5. にリヨンにあるセレストン劇場(劇場のそばを流れるソーヌ河を渡ると世界遺産に登録されている旧市街地の広がる場所)で観劇する前に、作中人物の心の動きを知りたいために目を通した一冊である。

4月9日

『日記』に「ジェームズ・ハドリー・チェイスの『犬を放せ』を面白くよむ」と書かれている。

James Hadley Chase, *Lâchez les chiens !*, Paris, Gallimard, 1950. 1エ/200

- ▶ 『日記』によれば本書に目を通したのはこの日。しかし、後に公開した「滞佛日記」(1953年に雑誌「近代文學」に発表)では、1952. 6. 3.に同書を「面白く読んだ」としている。二ヶ月ほどタイムラグがある。なお、書きこみなどは見当たらない。

4月17日

「チェイスの『12の支那人と一匹のねずみ』をよんだ」とある。

James Hadley Chase, *Douze Chinetoques et une souris*, Paris, Gallimard, 1948. 1エ/197

- ▶ 書きこみ、下線は見当たらない。遠藤は推理小説にはほとんど書きこみをしない。これは書物の性格からして当然のことか。なお、1954. 2. 「文學界」 「シャーロック・ホルムスの時代は去った」のなかで、この作品に触れ、ドイルやクリスティの探偵小説から味わった推理の面白さ、謎解きとは方向の違う、残虐性とマゾヒズム、人間の最も原始的な性欲と暴行を描いたハードボイルドとして、本書の「或る女が自分たちの仲間を裏切った別の女の顔に焼き鋺をあてる」シーンをあげている。

4月19日～20日

『日記』に書く。「死は仏蘭西留学以来、ぼくを離れぬ恐怖である。しかし、ぼくは今死ねない。少なくともあと三十年は生きねばならぬ。まだ一つの作品もかいていないのだ」。

4月22日

「チェイスの『蘭の肉体』を読む」とある。

James Hadley Chase, *La Chair de l'orchidée*, Paris, Gallimard, 1948. 1エ/196

- ▶ Série noireと題されたGallimard出版社のもの。書きこみなどはない。

4月28日～5月2日

『日記』に「医者は、三ヶ月の療養（パス・スペシアによる）を命じた……」と書きつける。

5月11日

「今日ガブリエル・マルセルの『聖職者』を読了した（マルセルのものを読むのは初めてでもある）」とあるが、おそらく下記の書を指すものと思われる。この後、戯曲を読むことが多くなる。遠藤の呼吸器官の乱れと文章の長さ、体調悪化（この先、「1日寝床にいる」という記述が散見される）と芝居の相性が存外マッチしているのかもしれない。

Gabriel Marcel, *Un Homme de Dieu*, Paris, La Table ronde, 1950. 1エ/465

5月12日

「クローデルの『乙女ヴィオレーヌ』と『交換』を読了する」とある。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

Paul Claudel, L'Echange, Paris, Mercure de France, 1947. 1エ/221

- ▶ 全頁カットしているが、下線も書きこみもない。本書を見ての感想だが、駆け足での読書という感が否めない。「何故この戯曲が良いのか、全くわからない。主題も平凡だし、構成も平面的である」と手厳しい感想を『日記』に書きつけている。

5月13日

こんな懊悩が記されている。「朝、血痰を亦みる。日本からは即刻帰国するように言って来ている。帰国すべきか.....否か大いに迷う」と。そんななか、「ポール・ルイ・ランズベールの『死の経験と自殺の道徳的課題』を読み始める」とある。

Paul-L. Landsberg, Essai sur l'expérience de la mort suivi du Problème moral du Suicide, Paris, éd. du Seuil, 1951. 1エ/414

- ▶ 見返しに『日記』の懊悩そのままの書きこみ。「この本は、ほくが、異国にて病に伏し／孤独の寂しさ、死の恐怖に毎日を送っていた時、よまれた.....」と。『日記』(5. 14.)には「死におびやかされつつある今のほくはこの本から慰めをえようとして此の本を読み始めたのであろうか」と書き、「生は純化の旅への道である」以下、本書から複数の引用。「しみじみとほくの心を打った」と書く。

5月15日

「クローデルの『真昼に分かつ』を読み始める」と書く。

Paul Claudel, Partage de midi, Paris, Mercure de France, 1948. 1エ/225

- ▶ 見返しにサインあり。カットしているが、書きこみはしていない。『日記』に、「『真昼に分つ』読了」とした後で「クローデルの世界はまだ、ほくには殆ど全く、よくわからない」(5. 16.)と記す。この時期、遠藤は肺の病に冒され、倦怠感と死の恐怖にとらわれていたが、憑かれたように精力的な読書をしている。

5月17日

仏蘭西に来て2年分の総括をする記述、長々とあり。

5月18日

「朝ミサ、ほくは自分の病気がなおるのを主に祈った」とある。「G・マルセルの戯曲『密使』を読了した」とあり、作品分析をしてもいる。下記5. 19. の記述を参照。

5月19日

「G・マルセルの『十字架のしるし』を読了.....」とある。前日の「密使」とともに、「十字架のしるし」は以下の本に所収されている。

Gabriel Marcel, Vers un autre royaume, Paris, Plon, 1949. 1エ/464

- ▶ L'EmissaireとLe signe de la croixが収録されている。Shusaku Endo Lyon, Mai 1952と記名あり。見返しに「l'Emissaire 人間の深部で犯される（選擇の問題）péché inconscient. Homme de Dieuと同じ主題。それと聖寵の世界との関係」とメモ書きしている。

同日, 「今日, J・リヴィエールの『神のみあとを……』を読み始めようとした。突然, 恐怖がほくの胸をしめつけた。やっ, ふれたこの信仰が再び, 消えるのは何と恐ろしい事か。そして再びあの, 懐疑の世界にはいらねばならぬとしたら……」と書く。

Jacques Rivière, A la Trace de Dieu, Paris, Gallimard, 1925. 1エ/593

- ▶ 『日記』の突然の恐怖の引き金は, 著者リヴィエールの悲運な最期と自身の姿とが不意に重なり合ったことによるのではないか。動揺をそのまま表すように, p. 100以降はアンカットのまま。

5月22日

『日記』に「この1月は殆ど1年のように長かった……」と記している。

5月24日

1950. 10. 27. に目を通した一冊「クロード・モーリアックの『ジイドとの対話』のマラガールの部分」にふたたび目を通して。

「一昨日買ったクセジュ叢書の『結核』を少し読んだ」とあるが所在不明。これは, 自分の体調を知るために読んだものであろう。

5月25日

「シエーネの探偵小説を読んだ。つまらぬ」とある。所在不明。

5月27日

赤裸々なノスタルジー。「たまらない旅愁, 日本の恋しさ……いかにフランスがうつくしくても, ああ, ほくはやはり日本が恋しい」。

6月～9月 スイス国境近くのコンブルーの国際学生療養所で過ごす。

6月8日

「久しぶりに読書を開始」とある。「チェイスの探偵小説を読む『ムゲの下に彼女をねむらさん』」とあるが所在不明。

6月13日

「帰国を決意す」。6. 14. 「帰国の準備にかかる」と『日記』に記す。

6月25日

「G・マルセルの『遺骸仮安置所』の決定稿を読了する」とある。この後、本についての記述は少なくなる。

Gabriel Marcel, La Chapelle ardente, Paris, La Table ronde, 1950. 1エ/466

▶ 血痰が出たり、微熱が続いていた時期で、読了した10日ほど前に帰国を決めていた。特別な書きこみなどはない。

7月29日

1951. 2. 6. 以来、2度目「ピエール・アンリ・シモンの『青い葡萄』を再び感歎を以てよみおわる」と記す。

8月2日

ヴァン・デル・メルシュの『神痕』を読み始める。所在不明。

この先、所在不明の本が続く。『日記』から書名のみを引いておく。

- ・ステファン・アンドレの『ユートピア』を読了。
- ・ドストエフスキイの『賭博者』を読み始める。
- ・トーマス・マンの『魔の山』をよみ始む。8. 17. に同書を分析。
- ・図書室の中からアメリカの兵隊の書いた『タラワ』原本を見つけ出し、それを夜、ベットの上で読んだ。
- ・夜、ドストエフスキイの『悪霊』中の「スタブローギンの告白」を読みかえしてみた(N・ボラヴェツェフの翻訳)。
- ・エリオットの『伽藍の殺人』を読み続く。

この先は『滞仏日記』(1952. 9.~1953. 1.) と題される。

9月×日

「ぼくの講演から二, 三日後」, と書く。遠藤はフランスで講演をしているのだ。どこかに草案が残っているかもしれない。

9月×日

「あのアリサの少女が今日、ぼくに再びジイドを読ませた。『イザベル』である」とあるが。所在不明。

10月8日

ジャン＝ルイ（友人）の婚約者として、フランソワーズの名前が初めて登場（注：フランソワーズ・パストルは遠藤が愛したフランス人女性）。「ずっと前、彼がみせてくれた写真では幾分子供子供していたのに、実際は体格もいい、顔も知性的にしまった、そして声の低い美しい女学生だった」と印象を書きとめている。

10月15日

久々に読書についての記載。「昨日かった『マルキ・ド・サドの生涯』を散読する」とある。

Gilbert Lely, *Vie du Marquis de Sade-Tome I 1740-1773*, Paris, Gallimard, 1952. 1エ/426

▶ Shusaku Endo octobre 1952 Parisと記名。著者Gilbert Lelyから直々にサインをもらう。p. 60には第2章（1740-1754）のポイントをまとめて次の3つの箇条書きを記す。1. L'abbé oncleがSadeに及ぼせるl'influences. 2. L'abbé oncleを18世紀的libertismeを描く 3. Aline et Valcourからの引用。Sadeは遠藤の研究対象であったが、それを裏づける仔細な読みの跡が感じとれる。たとえば「35才代の彼のvisage(顔)と晩年のそれとを比較せよ」(p. 95: portrait physique du Marquis de Sadeの箇所)とあり、Sadeの容貌に強い関心を払っていたことが知れる(Maurice Heine, *Le Marquis de Sade*参照)。また、Sadeの生涯を知る細かな注記にも目を配った読書をしている。なお、1巻、2巻(Tome II 1773-1814, 1957.)とも読みこまれているが、後に東京・紀伊国屋で買い足した2巻の後半は読んだ形跡はない。

11月 François Mauriacがノーベル文学賞受賞。

11月20日

「ジャン・マリー・キャプランの『征服者』を読了」とあるが、所在不明。ちなみに町田の市民文学館にあるJean-Marie Caplainの著書は《L'Homme marié》というタイトルの一冊だけ。

12月2日

『日記』に、「モーリヤック（注：Mauriacのカナ読み、ここではモーリアックではない）の『ガリガイ』を読み続く。どうしてあれ程ぼくの心を惹いていたモーリヤックがもはや、ぼくの熱情を呼び覚まさなくなったのか……」とある。

François Mauriac, *Galigai*, Paris, Flammarion, 1952. 1エ/509

▶ ジュルダン病院入院直前で、体調がすぐれなかった時期に読書。この本には、下線や書きこみはなく斜め読みという印象。

「ポンチーの『ユーマニズム・エ・テウル』（『ユーマニズムの恐怖政治』）を再読しつつ」とある。1951. 8. 17. の『日記』参照。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

12月5日

『日記』、体調不良は限界レベル。入院へ向けたカウントダウン。「再び死の感覚がぼくに甦ってきた。ぼくはぼくだけで死をになわなくてはならない。親も兄弟も恋人も友人もぼくをそれから助けてくれる事はできない。ぼくはそして、他人よりも死を自分の体に蔵しているのである」。なお、この先の『日記』に、読書に関する記述はない。

12月31日

『日記』に「病気で暮らしたこの1年」と記した後「ぼくはもう一度、ヨーロッパにくる。そしてもう日本には当分はかえらない。そのために日本にかえるのである。ぼくの住む所はやはり巴里だ」と書いている。前日に「お前とアフリカと印度に旅をする約束をした。いつかその日がくるだろう」と書いているように、心の支えとしてフランソワーズの存在が大きくなっている。

1953年（昭和28年）

パリ、ジュールダン病院に入院。2月 日本郵船の赤城丸にて帰国。

1月12日（『作家の日記』はこの日まで書かれていた）

『日記』の最終日。最終行は次の通り。「フランソワーズ。お前は未だ子供すぎる。お前は、あたかも明日がないように遊んでいる……」。

2章 遠藤周作は『テレーズ・デスケール』のどこを読んでいたか

『沈黙』のときも『侍』のときも、いつも小説を書き始める前にこのモーリヤックの小説を読み直してから、とりかかった。一生、くり返して読めるような小説を持たたことは、やはり文学を仕事にした者として幸福だった（『私の愛した小説』）

前章での長々とした読書チェックをふまえつつ、この短かい章では、『テレーズ・デスケール』（遠藤周作訳の講談社文庫：長崎市遠藤周作文学館所蔵）に遠藤自らが書きこんだ余白メモ、下線など読書の痕跡について私見を交えて書きとめておきたい。この小説のどこに、どう注目していたのかをページの順に箇条書きでまとめてゆく。周知のように、『テレーズの影を追って』『私の愛した小説』などこの佳作へ思いをよせながら、彼はいくつもの作品を編んでいるからである*。

* 新しい作品に取りかかる前に、遠藤は『テレーズ』を何度も再読したことで知られるが、事実、書きこみが赤鉛筆、青鉛筆、ペンと別れていて、繰返し本書を読みなおした痕跡が認められる。つまり、最初は原書を参照していたのかもしれないが、昭和41年に集英社ではじめて『テレーズ』の翻訳を手がけ、さらに昭和49年に講談社文庫で新訳が刊行されてからは、自分で訳した翻訳書を読んで、いわば呼吸を整えてから、新作へ挑ん

だようである。なお、遠藤のこの翻訳書の背景、文体の特色などについての細かな分析は、拙論「遠藤周作訳『テレーズ・デスケール』から見えてくるもの（上）（下）」（『明治大学教養論集』通巻452号・454号）を参照いただきたい。

◆女主人公については何箇所にも下線が引かれ、余白に書きこみもなされているが、たとえば以下のような箇所が注目に値しそうだ。

(1) p. 7 (『テレーズ・デスケール』講談社文庫の該当ページ)、序章の冒頭付近、女主人公テレーズを描写した「孤独で広い額」の箇所に赤鉛筆での傍線（ちなみに、p. 17「広いみごとな額」にも傍線。なお、この箇所への注目の意味については上記の拙論を参照いただきたい）。同じく「美しい秘密にみち、暗い秘密などを心にもたぬ人間」（p. 7）の箇所に傍線。遠藤は「秘密」のなかにこそドラマがあると常々指摘していた。

なお、遠藤周作の秘密に関するあれこれを「遠藤周作の秘密（上）（中）（下）」（『明治大学教養論集』通巻396号・402号・408号）ならびに「遠藤周作 年譜に隠された秘密」（『三田文學』No. 87）に記した。

(2) 「欲望や決意、余地できぬ行為の混沌とした流れを言葉だけで説得できるだろうか？」に傍線。同じく、「わたしは自分の罪さえわかっていない」「自分でも何をしようとしたかわからない」（p. 19）という箇所に傍線。夫ベルナルに毒を盛った女主人公自らが、その行動に自身をかりたてた「動機」がわからないとした有名な箇所。

(3) 「結婚の動機」とメモ書きして、「土地をわがものにするより、むしろ逃避の場所を結婚に見つけたかったのだろう」から「自分でもわからぬ心の不安から逃れて安心したかったのである」（pp. 32-33）にかけての数行に青線を引いている。

(4) アンヌへの妬心もからんで、「あれ」をやったシーンに二重・三重の横線を施している。青年ジャン・アゼヴェドの胸のあたりをピンで刺したシーンである。「（わたしはあれをやったんだ）（中略）怒りの感情にかられてではなく冷たく、まるであたりまえのこともできるように。便所でわたしは穴をあけた写真を捨て、水槽の紐をひいた」。このシーンは、そのまま『白い人』の描写にそっくり重なる。分析の詳細は拙論「遠藤周作の読書体験」（『遠藤周作研究』・創刊号）に記した注記にゆずりたい。なお、ジャンに関してはテレーズにルネ・バザンの著作を読んだかと問いかけている前後のシーンに下線（p. 68）。

(5) 欲情に溺れるベルナルを「ああ！ 思いきって遠くにこの男を遠のけることができたら！ ベッドの外の闇の中につき落とせたら！」（p. 46）という箇所。

遠藤周作がフランス語の書物群から受けた影響

(記) p. 21の上部の余白にSartreと書き、二重丸で囲う。傍線は引かれていないが、おそらくこの書きこみは「しかし人生の倦怠のために死ぬことはないだろう。列車の席に身をちぢめ眼をつぶってみる。ほんとうに自分のような頭の悪くない女が、この悲劇を夫に理解させられないのだろうか」というテレーズのモノローグの箇所についてのメモだと思われる。なぜならこの描写は、サルトルが指摘した「作中人物の自由」を犯している具体的な証例ととれるからだ。遠藤はサルトルのこの批評から強い刺激を受けていた。

◆テレーズの幼なじみアンヌに着目して、二箇所のチェック。ひとつは、「アンヌ・ド・ラ・トラレーズの清らかさは、何よりも無知からきていたのだった」以降、数行にチェック (p. 23)。あるいは、雲雀 (ひばり) を24口径の銃で撃つ遊びを好むアンヌの描写に着目して「アンヌとは？」 (p. 29) と余白に書きこみ。

◆夫ベルナルに関する描写のあれこれに着目し、何箇所かにチェックをしている。テレーズが夫のプラス面を見ていないという思いがあるためだ。たとえば、こんな箇所。

テレーズが学生時代のベルナルについて回想している以下のようなセリフに横棒を引いている。「ベルナルという男のかたい樹皮の下に、一種の心のやさしさがなかつたろうか？」(余白には Bernardの良さという意味であろう「Bのよさ」とメモ。p. 27)。あるいは結婚前のテレーズのベルナルへのこんな一言。「その困った考えを取り除いてくれるのはあなたよ、ベルナル」(p. 33)。また、テレーズが夫を冷徹に分析している写真の箇所。さらに、新婚旅行の最中に、食欲をなくしたかに見えたテレーズに「それとも、つわりかね…」(p. 44) と語りかけるシーン。そのセリフの後の「テレーズは微笑した。口びるだけで微笑した」という部分。そして、アルジュルズですっかり生きる力を失いかけているテレーズを「(ベルナルが) かつてなかったように看護してくれた」(p. 126) という箇所にもチェックを入れている。遠藤はテレーズが夫ベルナルの「良さ」に気づいていないことに不満を感じ、その点を嘆き、また批評家がベルナルの「良さ」に触れない点を何度も評論などで糾弾していた。(了)

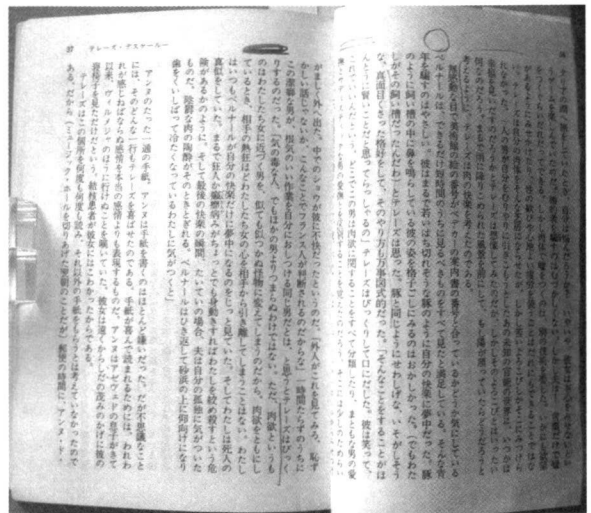


写真10 遠藤訳『テレーズ・デスケール』への書きこみ